この親子らに拍手を

福山市難聴学級開設５０周年
映画「泣きながら笑う日」制作４０周年
― 福山市市制施行100周年記念協賛 ―

記　念　誌

この親子らに拍手を

福山市難聴学級開設５０周年
映画「泣きながら笑う日」制作４０周年
－ 福山市市制施行100周年記念協賛 －

記　念　誌

目　次

1　記念誌発行に寄せて…… 1

2　記念式典

（1）式典オープニング …… 2

（2）主催者挨拶　実行委員長　池口義人 …… 3

（3）来賓挨拶　　福山市長　枝廣直幹 様 …… 5

福山市議会議長　小川眞和 様 …… 6

来賓紹介…… 7

（4）難聴学級卒業生体験発表 …… 8

西馬弘基さん・田中康弘さん・寺本佳代さん

（5）音楽感受合奏団演奏・紹介 …… 14

（6）映画「泣きながら笑う日」上映 …… 17

「この親子らに拍手を」監督・脚本　松山善三 …… 18

「感謝をこめて」制作委員会委員長　門田武雄 …… 19

3　記念式典パンフレット…… 26

4　記念式典の様子…… 30

5　新聞記事等…… 35

6　記念式典アンケート集約…… 40

7　写真で見る難聴学級の歩み…… 44

8　難聴学級の誕生　難聴児親の会　西馬孝夫さん …… 47

9　特別寄稿　元難聴学級担任　堀江時子さん …… 49

10　難聴学級卒業生の寄稿文 …… 59

11　難聴学級在校生の意見発表 …… 67

12　記念誌編集後記…… 69

「感謝をこめて」

一人ひとりの真実の訴えが，多くの人々の共感を呼び，その力が結集されるなら，どんな大事も成し遂げられるであろう

「泣きながら笑う日」制作委員会 委員長
福山市社会福祉協議会 会長
福山市障害児教育振興会 会長　　門 田 武 雄
【1978 年（昭和 53 年）3 月】

福山市難聴学級開設 50 周年，映画「泣きながら笑う日」制作 40 周年を記念し，福山市市制施行 100 周年記念事業協賛として，2016 年（平成 28 年）10 月 22 日　広島県民文化センターふくやまにおいて，記念式典を開催しました。

難聴学級開設 50 周年，映画「泣きながら笑う日」制作 40 周年を迎え，この間，行政の決断・教育関係者の情熱・医師の指導・保護者の理解と協力・映画関係者や企業の支援が結集され，大きな力となって実を結んだことを皆さまとともに喜び合いたいと思います。

今まで多くの難聴学級卒業生たちが立派に自立し，各方面で活躍していることが何よりの成果です。それだけに難聴学級開設時のご苦労や映画制作での大きな壁など，それを乗り越えて来られた先人たちの教訓を，私たちはしっかりと受けとめていかなければなりません。

この度の記念式典を契機に，改めて半世紀にわたって支えてくれた多くの方々に「感謝をこめて」記念誌として発行するものです。

式典オープニング

・児童合唱（福山市立西小学校５・６年生）
曲目：「心に咲く花」「地球聖歌」

・城北太鼓（福山市立城北中学校太鼓クラブ）
演目：「空」「祭り」「希望（のぞみ）」

主催者挨拶

福山市難聴学級 50 周年
映画「泣きながら笑う日」制作 40 周年
記念式典実行委員長
池　口　義　人

本日は，福山市難聴学級開設 50 周年，映画「泣きながら笑う日」制作 40 周年記念式を行うにあたり，ご来賓として 枝廣直幹 福山市長様，小川眞和 福山市議会議長様をはじめ，難聴児親の会の顧問の衆・参両議院・県議会，市議会の議員の方々，そして映画「泣きながら笑う日」の制作に力強いご支援を賜りました関係者の方々のご出席を頂き，盛大に開催できましたことを主催者として大変喜ばしく，心から御礼申しあげます。有難うございました。

この 50 年間，福山市の難聴児教育に取組まれた先人達のご苦労は，現在の私達に大きな教訓と足跡を残してくれました。そのお一人おひとりの姿が今でも私の眼に焼きついております。

難聴児のわが子を抱え，「福山市に難聴学級を！」と最初に声をあげた西馬孝夫 さん。

その西馬さんを激励し，親達を説得に歩き回った市会議員の 荒木計三さん。

早くから院内に幼児の相談，訓練教室を開き親や先生方にアドバイスされてこられた東川耳鼻科院長 東川清彦 先生。

そして，1966 年（昭和 41 年），広島県下初の難聴学級を西小学校に開設する大英断をされた徳永　豊 福山市長。

難聴学級の設置に，いち早く手を挙げ，引受けられた西小学校 今井　正 校長先生と，4 年後に引受けられた城北中学校 近藤通珍 校長先生。

「親が変わらなければ，子どもは変わりませんよ」と厳しさの中にも優しく指導された初の難聴学級担任 宇根亥佐男 先生。

1974 年（昭和 49 年）親の力を結集して，松山善三監督をお招きしての第 1 回の難聴児親の会全国大会を福山市で開催した福山市難聴児親の会 矢吹武美 会長。

“映画「泣きながら笑う日」は市民の協力で完成した映画”と市長会などを通して全国に発信された 立石定夫 市長。

「映画は全くの素人」と言いながら制作委員長として全国をかけめぐり，制作資金を集められた

社会福祉協議会 門田武雄 会長。

完成後の映画の全国公開実現のため，東奔西走された株式会社フューレック 佐藤芳紀 専務。

そして，福山へ何度も足を運ばれ，親の会の方と膝をつき合わせて話し合い，何度もシナリオを描き換えながら完成された映画界の“良心”松山善三 監督。

難聴児を持つ父親の苦労を見事に演じきり，期待に応えてくれた 坂本　九 さん。

この多くの先人達，今はもう誰もいません。しかし，私達はこの先人達の心をしっかりと引継いできました。

難聴学級の卒業生たちは，立派な社会人として成長し，現在も担任された先生方を中心に交流の輪を広げています。

西小学校の子ども達は，運動会や学習発表会では健常の学級とともに胸を張って演技や演奏にがんばっています。

城北中学校の難聴学級の生徒は，全校集会でクラスの学習や生活のことを全校に訴えかけています。

本日は，記念式典の後，卒業生の意見発表，音楽感受合奏団の演奏，映画「泣きながら笑う日」の上映と盛沢山の内容を用意しています。

この機会に難聴教育について，福祉や教育について，一層のご理解とご協力をお願いして，主催者としての挨拶といたします。

本日は，ご参加有難うございました。

来賓挨拶

福山市長
枝　廣　直　幹　様

難聴学級が西小学校に開設されて 50 年，福山市を舞台とした映画「泣きながら笑う日」が制作されて 40 周年という節目にあたり，記念式典がこのように盛大に開催されますことを，心よりお祝い申しあげます。

本市の難聴学級は，西小学校に続いて城北中学校に開設され，その後，西幼稚園や蔵王保育所に，さらに「ゼノ」こばと園の取組へと広がり，全国に誇り得る体系的，総合的な教育体制が整えられたものであります。

これまでの難聴教育の推進におきましては，きめ細かい配慮のもと，一人ひとりに応じた指導内容や方法の創造を通して，自立できる人間の育成をめざして取組んでこられた，多くの関係者の皆様の熱意と努力に厚く感謝申しあげます。

また，映画「泣きながら笑う日」の制作は，難聴学級 10 周年にあたり，福山市の取組を全国に発信しようとの機運が高まり，多くの関係者による制作委員会が結成され，市民の力で映画作りを進めるという他に例をみない取組により実現したものであります。

難聴の子どもを持つ親の愛情と苦闘を通して，一人ひとりが持っている「やさしさ」を描き，一人の人間として，あたり前に暮らせる社会について考える契機となり，多くの感動と共感を呼びました。

本市におきましては，「人間環境都市」をまちづくりの基本理念に掲げ，「福山に住んでよかった」と誰もが実感でき，いきいきと心豊かに生活できる「人権文化が根付いた地域社会の実現」に向け，取組んでいるところであります。

この 100 年間，私たちの福山市は，先人たちの努力により，大きく発展・成長を遂げて参りました。今後とも，市民の皆様との対話を大切にしながら，新たな未来づくりに果敢に挑戦いたしたいと考えておりますので，皆様方の一層のご協力をいただきますようお願い申しあげます。

終わりになりましたが，本日ご参加の皆様方のますますのご発展と，ご健勝を心から祈念いたしまして，お祝いのご挨拶といたします。

来賓挨拶

福山市議会議長
小　川　眞　和　様

難聴学級開設 50 周年，映画「泣きながら笑う日」制作 40 周年，大変長い歴史を感じております。

この間に，体の不自由な方についての社会的な立場は，正しく認識され，今，健常者とともに暮らすことのできる明るいまちづくりに向けた取組が進められております。

40 年前，50 年前は，障がいのある方を取り巻く環境は厳しい状況でございました。

しかし，本市の西小学校での難聴学級の開設を皮きりに，障がい児に関わる様々な取組が始まり，今日の明るいまちの大きな礎になっております。こうした取組により，本市では，障がいのある方々への配慮が至らないところは，お互いが手を取り合い助け合っていこうという気持ちが，かなり根付いてきていると思っております。

現在，障がい者の方に対する施設や教育に関わる課題，社会で生活していく課題などが，かなり整理されております。これもひとえに，今回の難聴学級開設 50 年，そして映画の制作から 40 年という長い歴史の積み重ねであると思っております。

先人たちの大変な努力に感謝を申しあげますとともに，今を生きる我々としては，その気持ちを大切にし，私自身も，市民全員が明るく楽しく生活できる環境づくりのために，これからも微力ではありますが，力を尽くしていきたいと思っております。

本日のご盛会を心からお慶び申しあげまして，意を尽くしませんが，お祝いの言葉に代えさせていただきます。ご盛会おめでとうございました。

来賓紹介

徳山威雄副実行委員長から来賓の紹介があった

【来賓出席ご芳名】

福山市長　枝廣　直幹　様

福山市議会議長　小川　眞和　様

福山市難聴児親の会顧問　参議院議員　宮澤　洋一　様

福山市難聴児親の会顧問　衆議院議員　小林　史明　様

福山市難聴児親の会顧問　広島県議会議員　三好　良治　様

福山市難聴児親の会顧問　福山市議会議員　稲葉　誠一郎　様

福山市難聴児親の会顧問　元福山市議会議員　森田　泰元　様

元広島県議会議員　門田　峻徳　様（映画「泣きながら笑う日」制作）

株式会社フューレック代表取締役社長　藤本　慎介　様

（映画「泣きながら笑う日」制作）

一般財団法人　義倉　代表理事　藤原　平　様（記念式典賛同）

難聴学級卒業生体験発表

三好雅章副実行委員長から福山市教育委員会の取組と発表者の紹介があった

皆様ご承知のように，本市は今年７月，市制施行 100 周年を迎えました。大きな節目を迎えた今年は，難聴学級開設 50 周年，映画「泣きながら笑う日」制作 40 周年という記念すべき年でもあります。

難聴教育 50 年の歩みは，幾多の困難がありながらも，子どもたちを支え，励ましてこられた保護者，先生方，関係者の皆様のご理解とご協力によって乗り越えてきた歴史であると捉えております。

教育委員会といたしましては，今日まで脈々と受け継がれてきた難聴教育の歩みを引き継ぐとともに，次の 100 年へ，さらにその先の未来に向かって，子どもたちの学びをより確かなものにし，福山に愛着と誇りを持ち，変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てることを「福山 100 ＮＥＮ教育」として，取組んでまいります。

本日お集まりの皆様のご理解と引き続きのご協力をお願いいたします。

それでは，難聴学級をご卒業され，本日，体験発表をしていただく３名の方をご紹介させていただきます。

「映画『泣きながら笑う日』と亡き父…そして母と先生方へ」

西馬　弘基（にしうま　ひろき）さん
1979 年（昭和 54 年）に城北中学校を卒業，現在，公務員としてご活躍中。

ただ今，ご紹介頂きました西馬弘基でございます。

福山市を舞台にした映画「泣きながら笑う日」は，障がい者（児）の福祉・教育の理解と啓発のため，1974 年（昭和 49 年）年に発足した「泣きながら笑う日」製作委員会の熱意と努力と多くの方々からの善意の募金が実を結び，1976 年（昭和 51 年）に製作されました。

この作品は難聴の子供を持つ若い夫婦の愛情と苦痛の日々を描き，「人の痛みを知る心」「人間の愛情の尊さ」を伝える映画です。

私がこの映画を鑑賞できたのは 30 年前の 16 歳のときでありました。
もう何回観たことでしょうか。

改めて，この映画を観るにつけ，今は亡き父と母への感謝の気持ちで胸がいっぱいであります。

私は３歳のとき急性肺炎のため高熱が出て，某病院で抗生物質であるストレプトマイシンにて一命はとりとめたものの，そのストレプトマイシンの副作用のため聴覚神経を侵されました。

当時は幼少であったため私の聴力（聞こえ）がどの程度であったかは残念ながら覚えておりません。

聞き取りの訓練や発声練習ができる教育施設をと，幼稚園から中学校まで「難聴学級」へ通学しました。さらに，学力が遅れないようにと家庭教師をつけてもらっていたため，外へ出て近所の友達と遊んだりすることは滅多に許されませんでした。

小学生の頃の難聴学級は，「集団式補聴器」と言い，先生が持つハンドマイクから出る音声を生徒である私たちはヘッドホンをつけて勉強しました。日常生活ではウォークマンのようにイヤホンをつけてボリュームにて調整できる「箱型式補聴器」をつけておりました。この箱型式補聴器をつけて，母から毎日毎日聞き取りや発音発声の訓練をさせられました。（ちなみに今，私が装用しているのは小型となった耳掛け式補聴器です。）

遊びたい盛りの私にとっては，この箱型補聴器をつけるのが嫌でたまらず，何度も補聴器を壊したり，紛失したりしました。映画のシーンにもあります，「箱型式補聴器」をおもちゃのようにぶん回して芦田川へ捨てるシーンは私の実話です…（苦笑）

当時の補聴器は高かったと思います。

発声練習は，例えて言うと，

・「ありんこの『あ』」と言う母の口元を見ること（口話術です。）

・口元を隠して「言葉」を聞き取り，何の「言葉」を発声したのか自分で発声してみること

・母の出す発声を聞き，何度も何度も繰り返して同じように言うこと

などでした。

母は四六時中つきっきりで熱心に教えてくれました。

映画では，母親役である女優の大谷直子さんが我が子を抱いて芦田川へ入水自殺をはかるシーンがありますが，これもまた実話です。

当時は，まだ聴覚障がい者に対する差別も根強く残っていましたし，父母の苦労は私にはとうてい計り知れないほどのものだっただろうと察します。

話は少しそれますが，先日，幼少の女の子を虐待して風呂場で死亡するという悲しいニュースがありました。

近頃では，よくネグレスト（育児放棄）や虐待の事件が起きていますが，それらを耳にするたびに私はとても心が痛む思いです。

私がもしもこの世に生まれてこなければ，確かに亡き父と母は苦労せず人並みに平凡な生活を送ってこられたのかも知れません。とは言え，この世に「生」を受けたかけがえのない尊い命です。たとえどんなことがあっても将来や未来のある子どもたちの命をむげにするこれらの事件は決して許されることではありません。

終わりに，この映画は聴覚障がい者（児）という障がいを乗り越えて，たくましく生きる親子の姿を基に，その親子に寄り添って真剣に教育に携わる者の取組を描き，「障がいがあるなしに関わらず，すべての子どもを私の責任でそだてなければいけない。」としています。聴覚障がい者（児）を描いたのではなく，「人々のやさしさ」や，「痛みの分かる人」を映画を通して私たちに教えてくれていると思います。

なかなか難しいところではありますが，自分も人の心の痛みが分かる人間であるよう，常に肝に

銘じたいものです。

なお，今日は，当時の模様が少しわかるようにパネルを掲示しておりますので，時間の許せる方はあとでゆっくりとご覧ください。

以上ですが，最後まで私のつたない話を聞いてくださり，ありがとうございました。

「今，社会人として自分に求められているものは…」

田中　康弘（たなか　やすひろ）さん
1975 年（昭和 50 年）に城北中学校を卒業，現在，会社員としてご活躍中。

ただいまご紹介を頂きました田中康弘です。どうぞよろしくお願い致します。

私は，当時居た ろう学校の先生からの勧めで，福山の西小学校難聴学級ができてから４年目に転校しました。それが私の難聴児教育の受け始めでした。

転校した理由は，当時の固定制の難聴学級ができたばかりなのか，多少聴力が重くても受け入れてもらえるからでした。

その頃の私は，難聴学級はどういうところなのかよくわからず自分は納得しないまま，両親の方針でいやおうなく聞こえる子供の世界に放り込まれたのです。転校した後，難聴学級で集団補聴器を使っての授業はまだよくても，休憩時間，交流学級などは聞こえる子供の話す内容がわからないまま過ごしたことがよくありました。

もう難聴学級に転校してしまった以上新しい環境の変化に適応していく他はなかったのです。いくら口話ができるといっても，私の耳は聴力がかなり悪いため，高校までは周りの生徒の話がほとんどわからないまま過ごすことが多かったので，友達付き合いがうまくいかなかった記憶があります。

いくら難聴学級のある，配慮のある学校といっても，当時の先生たちは一般の地域学校と同じで難聴のことを理解しているわけではないので，「聞こえないので，もう一度言って！」となかなか言えず，コミュニケーションに対するストレスが溜まりました。

両親は私が難聴学級に転校できて，人並みに勉強ができると思ったかもしれませんが，その頃の私は周りの子とのコミュニケーションがうまくいかず，親に「聞こえないことをもう少し考えてよ！」と心から叫びたくなることがありました。

今思えば，当時の先生達は難聴児教育をゼロから始めたのか，色々と一生懸命やられていたと思いますが，今の難聴学級に手話を導入して活用されているように，重度難聴を持つ私としてはもっと早く導入して欲しかったのが正直な気持ちでした。

もし難聴学級に最初から補助目的で手話を導入してもらえたら，楽しくコミュニケーションでき

たのでは？と思います。

福山の小中学校難聴学級から高校，大学へ進学しました。進学した大学は，講義での難聴学生に対する情報保障が全く用意されていないところでした。その時初めて難聴の障害を持つ先生と学生に出会い，彼らの聞こえにくい環境の中で努力されている姿を見て，自分はこれではいけないと，自分で講義の情報保障を確保するための努力と工夫をして，何とか大学を卒業できました。

大学から就職するため，神奈川県川崎市内にある大手電機メーカの子会社に入り，そして，首都圏内の聴覚障害関係団体に入りました。その関係で，東京の難聴幼児のための言語聴覚訓練に長く携わった専門家の講演を聴く機会がありました。

その講演を聞いて一番印象に残ったのは，言語聴覚訓練を行うことは必要だが，それよりも難聴児が大人になった時に困ることがないようにと「協調性」と「問題解決能力」を育てることがもっとも重要だということでした。

「協調性」と「問題解決能力」を育てることは，難聴という障害は引っ込み思案になりやすいのと，幼児期から豊かなコミュニケーション力を身につけて，積極的に他の子供と一緒に関わっていけるようにするのと，自分の持つ難聴障害を受け入れた上で自分から働きかけていけるようにすることでした。それができていないと難聴から来る問題を解決できにくくなるという内容でした。

私は，その講演を聞いて，難聴学級時代は引っ込み思案に陥ったことを引きずって来たのか自分の気持ちを強く言えなかったところがあったので，これではいけないと最初からやり直す気持ちで自分の聞こえにくいことを周りの人に伝え，そして自分は何ができるかを人に示すようにしました。そうしたお陰で周りの人の理解が進んだのか少しずつコミュニケーションしやすくなってきました。

私は今福山市内にある大手企業の関連会社で総務関係の仕事をしています。総務関係の仕事は，社内設備の管理，社員の仕事を支えることから，社内，取引先とやりとりすることが多くあり，コミュニケーション問題はついて回ります。

自分の仕事ができるようにするには，先ほど話したように，遠慮なく相手に難聴のことを伝えて電話，パソコンのメール，直接会って会話するなどのコミュニケーション手段を組み合わせてできるように工夫しています。難聴だから聞こえない，できないという前に，自分からできる方法を示していけば道が見つかります。

最後に，福山の難聴学級に入ることができたのは，私の人生にとって一番大きな転機だったと思います。私はもし福山に難聴学級がなかったら，おそらくそのままろう学校に居続けたことになり，今の私でなかったかもしれません。

また，福山の難聴教育は十分に受けたつもりでいても，自分に足りない点があれば「吾以外皆我師也（われいがいみなわがしなり）」という気持ちで補うようにして来ました。

私が難聴学級の後輩に伝えたいことは，自分の持つ難聴を素直に受け止めて，自分のできることは何かとよく考えて，将来の夢に挑戦してほしいということです。

ご清聴ありがとうございました。

「経験や体験を通して学んだことは…」

寺本　佳代（てらもと　かよ）さん
1998 年（平成 10 年）に城北中学校を卒業，現在 , 作業療法士としてご活躍中。

ただいま紹介を頂きました，寺本佳代です。よろしくお願いします。

私は生まれつき難聴で，小学校から中学校は難聴学級で，卒業後は難聴学級や療育関係の先生方，先輩たちが立ちあげてくれた支援活動の場でもお世話になりました。
中学校を卒業してから 20 年の月日が経ちましたが，難聴学級で過ごした当時の仲間は 20 年経った今でもずっと付きあえるかけがえのない存在となっています。

幼少の頃私は，なかなか自分の思いを伝えるのが下手くそで，人前に出るのも恥ずかしくて，もじもじと母親の後ろに隠れていました。

保育所に通っていましたが，言葉の訓練施設「ゼノ」こばと園を知って，そこに通い始め，楽しそうに遊んでいる同じ訓練に来ている子ども達をうらやましそうに見ていたようです。

同じ訓練に来ている子ども達から誘われたり，先生や親たちが背中を押してくれて仲間に入って遊べた時は本当にうれしそうだったとよく親から聞いていました。
私は小学校に入学する際，地元の学校か難聴学級のある西小学校かで，親がずいぶん悩んだと聞きます。「ゼノ」こばと園の先生の助言もあって，西小学校に進学することに親は結論を出したようです。

こばと園時代からの友達とそのまま一緒に西小学校に入れたことは嬉しかったです。

難聴学級に入ってみて“世界が広がった”という感じが子供心にしていました。
まず沢山の先輩や後輩，同じ悩みをもっている人が私だけではないという嬉しさを感じました。また安心出来る仲間集団で終わらずに，交流学級との交流も，健聴者の友人とつながっていく喜びも感じました。

その多くの人達との出会いが，私の人生においてかけがえのないものになっています。

今思えば，難聴学級では勉強内容も理解できるようにかみ砕いて教えてくださったり，仲間同士のケンカやトラブルも教材として取りあげてもらい，相手はどんな気持ちだったのか，なぜそんなことをしたのか，事あるたびにディスカッションをしたことを思い出します。

子ども心に“面倒だなぁ”と思うこともありましたが，そういう教科書では学べないもっと大切なことを沢山学びました。

自分の思いを伝えるのが下手だった私にとって難聴学級でじっくりと向き合う学習スタイルは自然と，不安が自信に変わり，自分はこれでいいんだ，ありのままでいいんだ，と自己肯定感を持つことが出来るようになっていました。

難聴学級の先輩達が生徒会役員になって活動をしたことを聞いて，２年生の終わりには私も生徒会役員に立候補してみたいと，行動を起こせたのもその１つです。

現在，私は医療関係の仕事に就いています。医療従事者になるための専門学校時代でも壁にぶつかる事はありました。今では簡易型の機器が充実していますが，当時は聴診器を使った血圧測定をすることが実習場面で求められていました。補聴器をつけている私にとってその場面が難しかったのですが，そこで終わらずに，吸盤を改良したものをつけた聴診器を先生達と作ったり，触診方法を友人達と学習したりして乗り越えてきました。

でも職場では，職員がマスクをつけることが多く，患者さんの様子を報告・連絡しあう“申し送り”の場面では限られた時間の中で申し送るために早口になり，聞き取ることも，読み取ることも難しく，悔しい思いをすることも多々ありました。毎回説明しないといけない大変さに自分の方が心折れてしまったりしました。

そんな時に先生や仲間達に相談したのです。「何度もあきらめずに伝えていくこと，自分にできることを探していくことで，理解を求めていくこと」と教わり，それからは申し送りをする人の隣に座るために誰よりも早くに行って情報収集をしたり，ゆっくり話してもらうことをお願いするなどと沢山アピールしてきました。それでも自分が分からなかった時は後から確認をとったりしていました。

その繰り返しで徐々に職場や患者さんとも信頼感を持てるようになり，今では私の姿を見ると自然とマスクをはずしてゆっくりと話してくれるようになり，スムーズなやり取りがもて，治療も自信をもってできるようになりました。

自分からの働きかけが大切なこと，あきらめない精神を培ってこられたのは，いろんな問題を１つ１つ教材として取りあげた議題に，向き合ってきた学習スタイルが活かされていると思います。自分より先を歩んでいる先輩達の存在が，聞こえにくい自分の，将来を考える時に大きな励みになりました。仲間や友人，先輩や先生との出会いの中で育まれてきた環境のおかげだと思っています。

これらの経験から，子を持つ母となった今私は，子供達の人間形成において仲間や友人，先輩を大切にし，自分を好きになり，自分の将来になんらかの夢を持つようになっていってほしいと願っています。

ご静聴ありがとうございました。

音楽感受合奏団演奏

【音楽感受合奏団の紹介】

音楽感受合奏団は，難聴者音楽感受研究所が主催するプロの音楽家で構成された団体です。

難聴者音楽感受研究所は，2001 年（平成 13 年）より神奈川県の「洗足学園音楽大学」で，難聴の方々へ音楽を届ける研究を開始しました。

音の感じ方は人それぞれでも，音楽には感動を共有できる力があります。

難聴者音楽感受研究所は，人が音楽から受ける恩恵を研究し，難聴の方と健聴の方が一緒に音楽を楽しめるための「聴覚のバリアフリー」を目指し，文化と教育の振興に寄与することを目的として研究活動を行っています。

今回は「もりのおとぶくろ」を演奏致します。

この「もりのおとぶくろ」は，物語を「わたりむつこ」さん，絵を「でくねいく」さんで作られた絵本です。

音楽感受合奏団の丸山典子さんが，これまでの研究結果を基に，音の意味を感じて頂く事を目的として，この絵本に音楽を作曲しました。

本日，この会場にいらっしゃる皆様と，音楽による感度を共有できることと思います。

【みんなが音楽を楽しめるように各所に工夫されています】

一般社団法人

難聴者音楽感受研究所

音の感じ方は人それぞれでも、音楽には感動を共有できる力があります。難聴者音楽感受研究所は、人が音楽から受ける恩恵を研究し、難聴者と健聴者の音楽聴取を補助し、人生を豊かにする環境を作り、文化と教育の振興に寄与することを目的として設立されました。

顧問
大沼直紀　**医学博士**
国立大学法人筑波技術大学名誉教授（元学長）

理事長
松本祐二　**東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 打楽器奏者**
洗足学園音楽大学 講師

一般社団法人難聴者音楽感受研究所
〒359-1133埼玉県所沢市荒幡888－11
TEL&FAX 050-1583-2520
メール onkan.jp@gmail.com
URL http://matsum4.wix.com/kanjyuken-music

音楽感受合奏団（おんがくかんじゅがっそうだん）
国内外各地で演奏活動している音楽家で結成された「音楽感受合奏団」は、聴く楽しみをもたらす、美的でユニークな演奏をいたします。

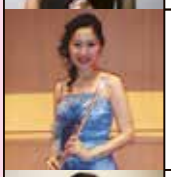
松本祐二（まつもと ゆうじ）；打楽器
1990年から1993年にかけてベルリン、ブルガリア、マレーシア、シンガポールなどの打楽器アンサンブルツアーに参加し、1994年東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団に入団。1996年洗足学園音楽大学講師に就任。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団打楽器奏者、洗足学園音楽大学講師、洗足学園音楽大学附属音楽感受研究所研究長、パステル音楽院ドラム科講師、一般社団法人難聴者音楽感受研究所理事長。

丸山典子（まるやま のりこ）；ピアノ＆作曲
洗足学園音楽大学ピアノ科卒業。
在学中、ヨーロッパ研修に参加。公立中学校音楽科教諭となる。これまでに、オーストリア、フランス、ハンガリー、イギリスで研鑽を積む。日本音楽療法認定音楽療法士(補)。ピアノを遠藤比佐、岡山京子、落合千代子、渡辺健二、分離唱を佐々木基之、音楽療法を塩谷百合子、二俣泉の各師に師事。現在、公立高等学校音楽科講師。

城倉かほる（じょうくら かほる）；歌＆語り
洗足学園音楽大学卒業。二期会会員。カワイうたのコンクール審査員。カワイ音楽研究会講師。
全国童謡歌唱コンクール関東甲信越決勝大会優秀賞（第2位）、全国「叱られて」歌唱コンクール審査員特別賞、山手の丘音楽コンクール第3位、。2005 ～ 2010年NHKおかあさんといっしょ「ぐ～チョコランタン小劇場」「ぐ～チョコランタンとあそぼ」歌のおねえさんとして全国のコンサートに出演。

河野直樹（こうの なおき）；役者＆語り
山梨県南アルプス市出身。
20代から舞台俳優としての活動を始め、その後劇団双数姉妹に所属。
舞台活動を続ける一方、最近ではテレビドラマ、映画への出演、番組ナレーション、朗読など、活動の幅を広げる。
今年10月には、全編即興で構成する舞台に出演予定。

伊藤倫子（いとう のりこ）；フルート
東京藝術大学音楽学部卒業。同大学院修士課程修了。在学中に安宅賞受賞。フルートを峰岸壮一、小泉剛 室内楽を中川良平の各氏に師事。東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団に在籍。
2007年、チョン・ミョンフン率いるアジア・フィルのツァーに参加。
演奏活動の傍ら、ジュニアオーケストラ、アマチュアオーケストラの指導に力をいれている。



伊藤友里香（いとう ゆりか）；フルート
洗足学園音楽大学卒業。洗足学園音楽大学大学院音楽研究科修士課程修了。第13回日本フルートコンヴェンションコンクール・ピッコロ部門入選。現在、関東地区の学校や音楽教室でフルートの講師を務めているほか、様々な分野での演奏活動を行う。洗足学園中学校・高等学校非常勤講師助手。
アンサンブル・ブルーメンシュトラウス、フルートアンサンブル・ripple markメンバー。

平木仁（ひらき ただし）；トランペット
神奈川県出身。桐朋学園大学卒業、同研究科修了。研究科在籍中に東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団に入団。1997年より2年間ミラノに留学、1998年にはスカラ座オーケストラ・アカデミーに在籍する。これまでにトランペットを田宮堅二、ジュゼッペ・ボダンツァ（元スカラ座首席）の両氏に師事。
現在、東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団トランペット奏者、昭和音楽大学で講師を務める。

渡邉信一郎(わたなべ しんいちろう)；ヴィオラ
桐朋学園大学在学中に東京都交響楽団に入団。霧島国際音楽祭にて特別奨励賞、併せてサントリー賞受賞。アフィニス文化財団奨学金を得て、ドイツ・ハンブルク国立音楽大学に留学。ブラームス国際コンクール・ヴィオラ部門入選。10年間東京都交響楽団ヴィオラ奏者を経て、現在東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団副首席奏者。江藤俊哉、徳永二男、店村眞積、深井碩章の各氏に師事。

畑野誠司（はたの せいじ）；チェロ
10歳よりコントラバスを始める。千葉県立津田沼高校音楽コースに入学しチェロに転向。
1988年東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団に入団。1991年から2001年まで首席奏者を務める。1991年第1回出光音楽賞奨励賞受賞。チェロを堀了介、アンナー・ビルスマ各氏に師事。
バロックチェロ・通奏低音奏者としても活動している。

秋場一宏（あきば かずひろ）；打楽器
北海道雨竜町出身。
これまでに日本フィルや東京シティ・フィルなど多数の演奏会に出演。海外公演も多くドイツ、オーストリア、ベルギー、アメリカなど各国でいずれも好評。洗足学園ニューフィルハーモニック管弦楽団団員。
アプリコシンフォニーオーケストラ打楽器トレーナー。

森美咲（もり みさき）；打楽器
洗足学園音楽大学大学院音楽研究科修士課程を首席にて修了。奨学金を授与される。
現在はマリンバ、スティールパン奏者として演奏活動を行う傍ら、Bloom音楽教室代表として幼児から中高年まで幅広い世代への音楽教育にも積極的に取り組んでいる。

安里圭一郎（あさと けいいちろう）；打楽器
Steelpan Orchestra PANNOTEMAGIC所属。2006年JAPAN Facilitator's Playshop修了。
2011年、トリニダード＆トバゴで開催されたInternational PANORAMA CompetitionにSilverStarsのメンバーとして出場し、第3位受賞。

映画「泣きながら笑う日」上映

橋本哲之副実行委員長から映画の紹介があった

この映画は，難聴学級開設 10 年を機に，福山での取組を，全国に発信し，一人でも多くの人に知っていただき，自分の問題として考えて欲しいという機運が関係者の間で持ちあがり，映画の制作に繋がったものであります。

もちろん，映画界の俊才 松山善三氏が，難聴児を持つ親との出会いの中で，深く心を動かされ映画化を決意されたことが，映画「泣きながら笑う日」が生まれる契機となったことは言うまでもありません。

制作に当たっては，市民各層による制作委員会が組織されましたが，映画が企画されてから完成に至るには，幾多の困難があったと聞いております。しかし，制作委員会の皆様の強い情熱と誠意，そして市民の方々を始め，県内外の多くの皆さまからの励ましと善意の募金に支えられて完成の運びとなりました。

40 年も前に，福山を舞台にしたこの映画が，多くの人たちの善意が結び合わされて制作され，全国に発信されたことを改めて誇りに思うとともに，市制施行 100 周年の今日，こうして再び上映の機会を持てますことは，大変意義あることであり，先月亡くなられた 松山善三監督にも喜んでいただけるものと考えております。

松山監督は，映画完成後の記念誌に手記を寄せてくださいましたので，少しお伝えさせていただきます。

「僕は，映画のラストシーンで，去り行く親子三人に向かって『頑張れ』という声援を送った。画面に出ている通行人や野次馬の声ではない。彼らは黙して語らない。現実は冷たい。

けれども，この映画を見てくださった観客のすべては，画面の親子に「頑張れよ」と優しい声をかけてくれるだろう。その時，映画の光と影の世界は，必ず現実の世界へ橋をかけてくれる。昔は，映画が終わると，よく拍手がおこった。その拍手と歓声を，僕は画面にぶち込んだ。このラストシーンには，二重三重の僕の願いが込められている。」

この松山監督の願いと声援が，もっともっといつまでも広がっていくことを願っています。

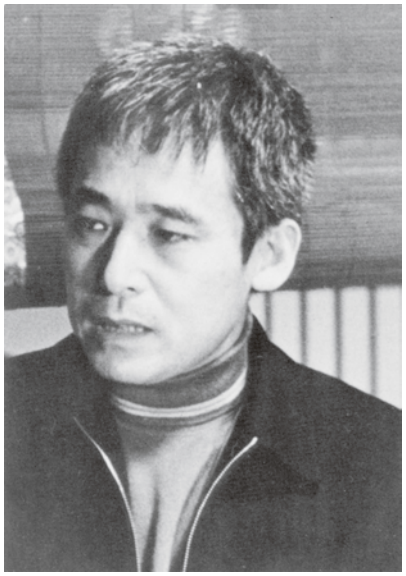
なお，この映画の貴重なフィルムも劣化しつつあったため，株式会社フューレック様のご協力により，８年前に，市社協法人化 40 周年の記念事業としてＤＶＤ化に取組，字幕と副音声を追加いたしました。

本日は，字幕を加えて上映させていただきます。

それでは，どうぞごゆっくりご覧ください。

「この親子らに拍手を」

映画「泣きながら笑う日」に願いを込めて



映画監督
松　山　善　三

募金で出来あがった映画

僕は，この度，映画「泣きながら笑う日」という映画を創った。自分の創った作品について，ものを書いたり，声高にしゃべったりすることは恥ずかしいことだが，この映画は，よくぞ「完成した」と僕は思う。

広島県福山市に住む人々の，温い応援と協力がなかったなら，この映画は，途中で雲散霧消していただろう。この映画は「難聴児教育」への熱意と指導，その施設の完備では，全国唯一といわれる「福山市」と，そこに住む「心ある人々」の企画立案によって生まれた。

親たちの反発にびっくり

僕は一年半の取材を終えて脚本を完成させた。いざ撮影を開始しようとして，また二つの大きな山にぶつかった。ひとつは製作費の値上がり，配給交渉の失敗である。もうひとつは身体障害児を持つ親たちの中からの脚本への異論，反発，改稿要求が出た。僕はびっくり仰天した。

けれども，ついに完成したのは，とにかく最後まで走ろうと呼びかけてくれた市民と，立案者たちの熱意のおかげである。僕はただ，馬場を引きずりまわされ，懸命に走っただけである。今，僕はこの三年間の日々を思い浮かべながら，人間と人間の出会いに感謝し，その汗が映画フィルムの一コマ一コマに染みついていることに誇りと喜びを感じている。

嘘だけど真実に近い

僕は，映画のラストシーンで，去り行く親子三人に向かって「頑張れ」と声援を送った。映画に出ている通行人や野次馬の声ではない。彼らは黙して語らない。現実は冷たい。

けれども，この映画を見てくださった観客のすべては，画面の親子に「頑張れよ」と優しい声をかけてくれるだろう。その時，映画の光と影の世界は，必ず現実の世界へ橋をかけてくれる。昔は，映画が終わると，よく拍手がおこった。その拍手と歓声を，僕は画面にぶち込んだ。このラストシーンには，二重三重の僕の願いが込められている。このシーンは「嘘」だけど「真実」に近いと僕は信じている。それを「感傷」だ「偽善」だという人もいるけれど……「感傷」や「偽善」を伴わない「愛」がこの世に存在するのだろうか。

【1978年（昭和53年）3月】

「感謝をこめて」

「泣きながら笑う日」制作委員会
委員長
門　田　武　雄

1977 年（昭和 52 年）1 月 20 日，市民会館大ホールは超満員の鑑賞者で埋めつくされ，市民の暖かい支援と期待を寄せられた映画「泣きながら笑う日」の招待試写会が催されました。

上映に先だち，この映画の制作を快く引受けていただいた，映画界の巨匠・松山善三先生の脚本，監督，制作者としての情熱を傾けられた講話，主演で母親を演じた大谷直子さんの体験を通じての，この映画の推賞のことば，制作委員会名誉会長立石市長の経過を含めたあいさつが披瀝され，来場者はこぞって真剣に耳を傾け，この映画制作の意義を深くかみしめられた様子が，一人ひとりの顔の表情から伺い知ることができました。

私は，この日，映画制作委員会委員長としてお礼のことばを述べることになっておりましたが，自分でも判らぬほどかたくなにそれを拒み，皆さんの前でお礼のあいさつを申しあげることができませんでした。

思えば，1974 年（昭和 49 年）10 月に発足した映画制作委員会の委員長を引受けて以来，この日まで非常に永い歳月を感じました。「映画のことは何も知らないのに，こんな重大な仕事が果たして出来るのか」「なぜ委員長という大役を引受けたのか」「いや，この仕事こそ，天から私に与えられ，成功せねばならない仕事である」と自問自答を繰りかえし，映画の内容とか，資金の募金問題などいろいろな難問を抱え，心配と不安が交錯し，眠れぬ夜も何日かありました。私は常に自分の行動を反省し，「やはり野におけ蓮華草」の言葉を思い起こし，れんげ草のようにしっかりと大地に根を張って裏方として市民各位に真実を訴え多くの人びとの共感を呼び，その力を結集して行けば，大事も成し遂げられるのではないかと信念を持直し，取組みました。それから毎日毎日を，東に西に募金集めに駆け巡って，ご理解を得るうちに，社会団体・福祉団体をはじめ内外市民の方々から積極的な申込みが寄せられ，日本鋼管（株）をはじめ多くの企業から多額の寄付をいただくことができました。さらに報道関係各社の有形無形のご協力と励まし，一方では名誉市民平櫛田中先生をはじめ，有名な諸先生方の絵画，書，彫刻のご寄付など，思えば何万人，何十万人の人々の願いと善意によって，この映画の完成に漕ぎつけることができたと申しても過言ではありません。

こうした各方面からお寄せいただいた心暖まるご好意に対し，どのような言葉でお礼の気持を申

しあげたらよいのか。待ち遠しかったこの日，万感胸にせまり，張りつめた気持がほぐれぬままあいさつに立つ自信が失われていたのが事実であります。

静まり返った暗転の場内に，やがて伴淳三郎さんの墨こん鮮やかに書かれたタイトルが，音響効果とともにスクリーンを彩ると，大観衆のまなこが一点に集中し，知らず知らずのうちに。亀田次郎・栗子・啓一という一家の苦しみと人間愛のドラマに魅了させられ，１時間 50 分の時間が，感嘆と涙と励ましの感情につつまれる中，あっという間に終えんを迎え，しばし立ちあがることさえできない状態でありました。ともかく上映が終わって，場内は無言の拍手がひき止まず，またもや私の目がしらは熱くなり脳裡に走馬灯のようにいろいろの事が浮かんでは消え，汗がどっと吹いたのを覚えております。

表現が適するかどうかわかりませんが，感動のるつぼとはこんな状態をいうのでしょうか。「すばらしかった」「泣かされた」と周囲の方々も目を潤ませて，言葉にならぬつぶやきとなり，呆然とされている姿を仰いで，ただひたすらに「有難うございました」と両手をついて，お礼を申しあげたい気持でいっぱいでございます。

松山先生の優れた手腕を改めて見直すとともに，坂本九・大谷直子・名子役を演じた上村和也君ほか出演者の好演技に拍手を送って称えたいものであります。ここまでの優秀作品ができあがったことは，一日も早く全国で紹介していただきたいと念願し，それから各関係方面に対し働きかけを続けました。

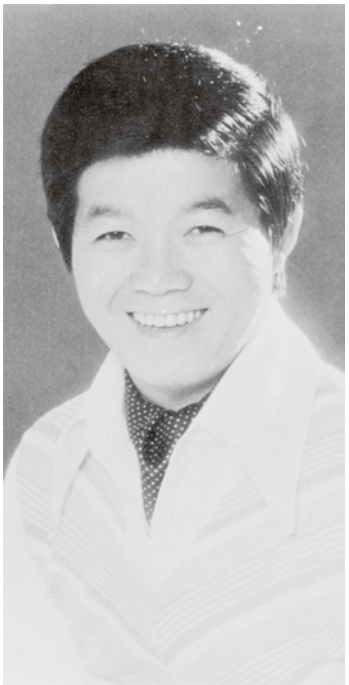
それにしても，東川医師のご熱意，教育委員会，関係学校の諸先生方および難聴児親の会の献身的誠意，子どもたちの努力，上映に当たっての藤本興業・社長並びに専務の努力，こうした関係者が一丸となって，何一つ不足もいわず，苦しみにも耐え，裏方として縁の下の力持ち的なご協力があったことに対し，頭が下がる思いがいたし，終生忘れることができません。福山ことばで「できたのーや」「よかったのーや」と頬に涙を伝わせ，私と肩をたたき合って，心底から喜んでもらった人達に何も報いることが出来ない私，ただただ感謝の念を捧げるのみであります。今回，文部省の選定映画に推され，さらに全国の松竹系映画館で上映されることが決定し，関係者の皆さんとともにこの成果を歓び，感激を分かちたいと存じます。

しかし，私達はこの映画の完成を期に，次の事業へと一層の飛躍をはからねばなりません。

映画にもありましたように，障害児を持つご両親，ご家族の苦しみは，想像以上のものであります。ある時は自分の命に代えてでも人並みにしてやりたいと願い，ある時は絶望のあまり，子どもともに死を決意されたこともあったでありましょう。“強く生きねばならない“と自覚している人たちを，よく理解し，励まし，協力できる世の中の体制づくりや，人間愛に芽ばえ，誰もが暖かく迎えることのできる気持を喚起し，障害者福祉の向上に努めねばならないのであります。私は，福山の街に灯された小さな善意の結集でできあがったこの映画が，全国に広く紹介され，どこの市でも町でも「やればできるんだ。やらなければならない」という現実を知って頂くとともに，限りない福祉活動の輪を広げてゆく足がかりとなる役割を果たしてくれるなら，これに過ぎるよろこびはございません。

（福山市社会福祉協議会会長）

【1978 年（昭和 53 年）３月】



――スタッフ――

企画　「泣きながら笑う日」制作委員会
制作　「泣きながら笑う日」制作プロダクション
脚本　松山善三
監督　石原興
撮影　木下忠司
音楽　倉橋利韶
美術　中島利男
照明　木村清次郎
録音　園井弘一
助監督　家城俊彦
装飾　安田彰一
制作主任　渡辺寿雄
補
協力　福山市
京都映画株式会社

――キャスト――

亀山次郎　坂本九
栗子　大谷直子
啓一　上村和也
亀山しず　富田恵子
康男　緒方拳
雅子　中田喜子
一ノ瀬明　小林桂樹
和子　草笛光子
中井雪子　高峰秀子

地元出演者
東川清彦（東川耳鼻科院長）
佐藤節郎（城北中学校）
美山大麓（城北中学校）
堀江時子（西小学校）

方言指導
宇根亥佐男（曙小学校）
佐藤秀山（曙小学校）

小林桂樹

草笛光子

高峰秀子

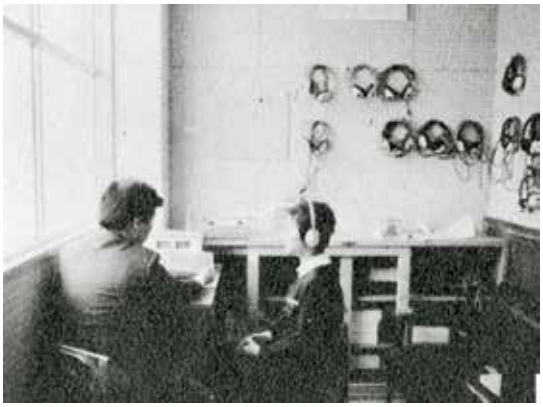
上村和也

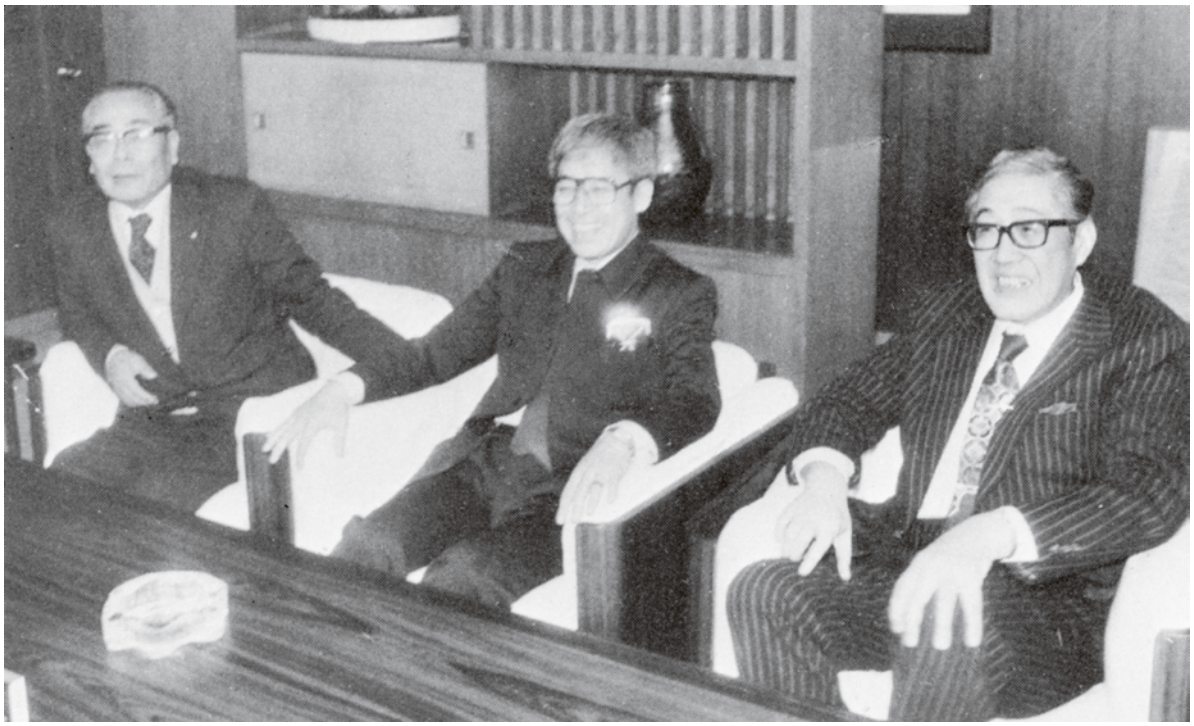
緒方拳

中田喜子

1974年(昭和51年)11月

泣きから笑う日 撮影風景





1976 年（昭和 51 年）12 月　松山善三監督　映画完成挨拶のため来福
左より，門田武雄委員長・松山善三監督・立石定夫市長

1991 年（平成 3 年）1 月，『難聴学級開設・西小学校 25 年，城北中学校 20 年，記念行事』の際上映された映画「泣きながら笑う日」を見た高校生の感想

15 年前，福山で作られた映画「泣きながら笑う日」を見る機会ができました。…言葉の訓練を見ていると，本当につらくて私の訓練をすぐに思い出してしまって涙が出てしまいました。あの頃は泣き通しの毎日でした。でもよくがんばったなあ，だから今日までこられたのです。つらい訓練を乗り越えたら，一緒になって笑ったり，おしゃべりしたり家庭に花が咲くだろう，絶対に，そう思ってやってきました。私が言葉を初めて言えた時，両親はどんなにうれしかったことでしょう。一貫した難聴教育が整っている福山へ転居して本当によかったと思います。

（高2，M・O）

福山市難聴学級開設50周年
映画「泣きながら笑う日」制作40周年

福山市市制施行 100 周年記念協賛

記念式典

と　き	２０１６年（平成２８年）１０月２２日(土)
ところ	広島県民文化センターふくやま
主　催	福山市難聴学級開設５０周年・映画「泣きながら笑う日」制作４０周年記念式典実行委員会
協　賛	一般財団法人義倉・福山市医師会・松永沼隈地区医師会・深安地区医師会・府中地区医師会・尾道市医師会・東川耳鼻咽喉科医院・福山聴覚障害教育研究協議会

12：30	オープニング ・児童合唱（福山市立西小学校５・６年生） ・城北太鼓（福山市立城北中学校太鼓クラブ）
13：00	開会 ・主催者挨拶　実行委員長 ・来賓挨拶　福山市長 福山市議会議長 ・来賓紹介
13：20	体験発表
14：00	音楽感受合奏団演奏 ・絵本「もりのおとぶくろ」の朗読と演奏
14：45	映画「泣きながら笑う日」上映
16：40	閉会挨拶

※要約筆記，手話通訳があります。

＜ご　　挨　　拶＞

福山市が市制施行１００周年を迎えた今年は，難聴学級が西小学校に開設されて５０周年，福山市を舞台とした映画「泣きながら笑う日」が制作されて４０周年です。

難聴学級は，西小学校に続いて５年後に城北中学校に，そして，「幼児期からの教育が大切」と西幼稚園・蔵王保育所に開設されました。さらに，「ゼノ」こばと園の取組みも行なわれるようになり，全国に誇り得る系統的総合的な教育体制が調えられました。

そして，難聴学級開設１０周年を機に，こうした福山市の取り組みを全国に発信しようとの機運が生まれ「泣きながら笑う日」の制作へと発展していったものです。

それぞれが，１００年・５０年・４０年などの節目を迎える今年を，一人ひとりを大切にする本市のこれまでの教育を改めて見つめ，これからの発展をどう図っていくべきかを考える大切な機会とするために，関係の皆様のご賛同とご協力をいただいて記念式典を開催するものです。

実行委員長　　池口 義人

＜ 体験発表 ＞

1　「映画『泣きながら笑う日』と亡き父…そして母と先生方へ」
西馬　弘基　（1979 年城北中学校卒　公務員）

2　「今，社会人として自分に求められているものは…」
田中　康弘　（1975 年城北中学校卒　会社員）

3　「経験や体験を通して学んだことは…」
寺本　佳代　（1998 年城北中学校卒　作業療法士）

＜ 難聴者音楽感受研究所 ＞

音の感じ方は人それぞれでも，音楽には感動を共有できる力があります。難聴者と健聴者が一緒にこの力を受けるにはどのようにすれば良いかを考え，2001 年より洗足学園音楽大学内において人工内耳と音楽についての研究を開始されました。

2007 年に同大学内に「音楽感受研究室」を 2013 年には同大学附属音楽感受研究所を設置され，2015 年一般財団法人難聴者音楽感受研究所となり，聴覚のバリアフリーをめざした音楽の研究活動を続けています。

顧　問：大沼直紀　　医学博士
国立大学法人筑波技術大学名誉教授（元学長）
理事長：松本祐仁　　洗足学園音楽大学講師
東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団　打楽器奏者

＜ 音楽感受合奏団 ＞

「音楽感受合奏団」は国内外各地で演奏活動をしている音楽家で結成され，聴覚に障がいがあっても最新の医療である人工内耳で聴覚が高められた人たち，補聴器を使用している人たちに，生演奏を楽しんでいただきます。

今回は絵本「もりのおとぶくろ」の朗読に併せ，オリジナル音楽を演奏します。

作：わたりむつこ　　絵：出久根育
出版社：のら書房　　作曲：丸山典子

～　難聴の子どもたちに教育を！
子どもたちの願いに応えて半世紀　～

〈難聴教育５０年の歩み〉

1966 年（昭和 41 年）	西小学校に県下初の難聴学級開設
1968 年（昭和 43 年）	難聴児親の会結成
1970 年（昭和 45 年）	城北中学校に難聴学級開設
1972 年（昭和 47 年）	西幼稚園に難聴学級開設
1973 年（昭和 48 年）	蔵王保育所に難聴幼児保育所開設
1974 年（昭和 49 年）	難聴児親の会全国大会開催
1976 年（昭和 51 年）	映画「泣きながら笑う日」完成
1978 年（昭和 53 年）	難聴幼児通園施設「ゼノ」こばと園設立
1991 年（平成　3 年）	難聴学級開設 25 周年記念式典開催
1997 年（平成　9 年）	難聴児親の会全国大会開催
2002 年（平成 14 年）	西幼稚園に 4 歳児難聴学級開設
2006 年（平成 18 年）	西幼稚園が西小学校校舎内に移転
2009 年（平成 21 年）	映画「泣きながら笑う日」DVD 化
2016 年（平成 28 年）	難聴学級開設 50 周年記念式典開催

児童発達支援センター「ゼノ」こばと園（親子通園）

現在聴覚部門には 0～5 歳児まで 30 名が在籍。保護者への支援及び遊びや生活の中で，きこえ・ことば・コミュニケーションの力を育てて大切にしています。西幼稚園との併行通園及び西小・城北中へ進学する卒園生が多くいます。発達部門での相談や療育にも幅広く取り組んでいます。

福山市立西幼稚園

聴覚障がいのある子どもたちはたくさんの友達とともに，様々な遊びや栽培，当番活動などの体験を通して，思いや考えを伝えあい，友達とかかわる楽しさや協力する大切さを感じています。友達と一緒に活動することを楽しみながら，”幼稚園大好き”“友達大好き”の気持ちを膨らませています。

福山市立西小学校

本年度は，１年生から６年生まで，計１３名が在籍しています。難聴学級での少人数の学習と通常学級での交流及び共同学習を通して学力をつけています。交流の授業やわかりあう集会（全校集会）・行事・掃除・給食・休憩時間などさまざまな場面で，ともに成長しています。

福山市立城北中学校

本年度は，１年生３名，２年生２名，３年生３名，計７名在籍しており，学年別学級編制で学習しています。学習はもちろん，部活動でも主体的に活動し，充実した学校生活を送っています。毎年，生徒総会では，理解してくれる仲間を増やすために意見発表をしています。

＜ 映画「泣きながら笑う日」 ＞

日本で唯一就学前から中学校まで一貫した難聴児教育制度を実施している福山市に，1974 年 10 月，福祉，教育団体を中心に制作委員会が結成され，全国の人々の貴重な募金を基に制作されました。

この映画は，若い夫婦が幼い我が子の高熱を下げるために抗生物質を注射したことで難聴になったことを知らされ，わずかばかりの家財をトラックに積み，親兄弟とも別れて福山までたどり着き，何度も傷つき，つまずきながらも，ついに我が子の「いのちの叫び」を聴くまでに至った感動の物語です。

監督の松山善三氏は「本来，福祉とは他人の痛みが分かることである。この映画は難聴児を描いたのではなく，補聴器よりも大切で必要なのは人々の優しさであり，痛みのわかる友人である」と提起したかったと語られています。

脚本・監督　松山善三　　出演　坂本九　大谷直子 上村和也　難聴学級の児童生徒と担任教師

＜ 50 周年に寄せて ＞

この５０年間で西小・城北中の難聴学級卒業生は２００名弱。学級開設当初は一クラスの人数も多く，幼児教育から拒否され，言葉は少なく，互いの意思疎通もままならず大変だったことを思い出す。

そのうち補聴器や読話（口の動きで話を読み取る）にも慣れてきて，教室の中で言葉が飛び交い，どんなににぎやかになったことか。学習の場から置き去りにされる状況もなくなっていった。

健聴のクラスで教科学習をする通級制と違って，固定制で同じ障がいを持った仲間と教科学習をし，共に過ごす時間が保障されたことの意義は大きい。実技教科や学校行事に交流学級の子どもたちとともに参加できたことも。

卒業生たちは，特別支援学校（元聾学校）高等部へ進学する者もいたが，ほとんどは高校へ進学し，健聴のクラスで学び，社会人として仕事，結婚，子育てにも力を注いでいる。互いの交流も盛んにあるようで，うれしいことだ。

今の学校では，要約筆記，手話通訳もあって，より学びやすくなっていて，理解が広がってきている。さらにいろんな分野で活躍していってほしい。　　元難聴学級担任　　堀江　時子

福山市難聴学級開設５０周年・映画「泣きながら笑う日」制作４０周年記念式典実行委員会

委 員 長　池口　義人（映画「泣きながら笑う日」制作関係者・元福山市教育長）
副委員長　三好　雅章（福山市教育長）
　　徳山　威雄（西学区まちづくり推進委員会委員長）
　　橋本　哲之（福山市社会福祉協議会会長）
実行委員　岡本　博光（西公民館長）
　　渡邊　　弘（福山市まちづくり推進部人権推進課長兼福山市人権平和資料館長）
　　寄高　俊樹（福山市教育委員会学校教育部指導課長）
　　稲葉なおみ（福山市難聴児親の会前会長）
　　塩出　順子（児童発達支援センター「ゼノ」こばと園長）
　　堀江　時子（元福山市立西小学校・城北中学校難聴学級担任）
　　石岡　悦子（元福山市立西小学校難聴学級担任）
　　乗兼　誉敏（福山市立西小学校 PTA 会長）
　　北村　和久（福山市立城北中学校 PTA 会長）
　　福丸　敬美（福山市立西幼稚園 PTA 会長）
事務局相談役　髙橋　和男（福山市社会福祉協議会副会長・元福山市教育長）
事務局長　小畠　八重（福山市立西小学校長）
事務局次長　荒木　一夫（福山市立西幼稚園長）
　　岡野　英俊（福山市立城北中学校長）
事務局員　土屋　充宏（福山市社会福祉協議会副局長）
　　高橋　雅和（福山市人権推進課長補佐兼次長）
　　渡部　智子（福山市教育委員会指導課人権教育担当次長）
　　橋本みき子・石岡　和美・三藤　有加・佐長　幸子（福山市難聴児親の会）
　　中山　浩志・陶山　清（元難聴学級担任）
　　平賀　孝明・北川　佳子・宮脇　典子・田渕　美好（城北中学校）
　　高垣　和子・石井　力・清水　恭子・坂本　佳子（西小学校）
　　土屋　忍・城迫麻衣子・三島　末季（西幼稚園）
　　杉之原　茜（西幼稚園ＰＴＡ）

【大勢のスタッフが協力し受付開始】

【ほぼ満席の客席】

【オープニングスタート】

手話通訳 福山手話サークル芦の会
要約筆記 福山要約筆記サークル「さんりん車」

【難聴学級卒業生
による体験発表】

【音楽感受合奏団による演奏】

【パネル展示に見入る来場者】

朝日新聞
2016年(平成28年)10月20日 木曜日

福山の難聴学級 節目の50年

22日、関係者ら地元で記念式典

難聴の子どもたちに教育を――。親や医師、教育者らの尽力で福山市に難聴学級が開設され今年で50年。全国に先駆けて幼稚園から中学まで一貫した難聴児教育制度を築いてきた。その思いは、40年前に制作した映画「泣きながら笑う日」に込められている。半世紀の歩みを振り返る記念式典が22日、開かれる。

映画「泣きながら笑う日」のワンシーン

県内初の難聴学級は1966(昭和41)年、西小学校にできた。70年に城北中、72年には西幼稚園にそれぞれ難聴学級が設置された。一般のクラスで教科学習をするのではなく、同じ障害のある仲間と学習や生活をする形だった。

この一貫した難聴児教育制度に力を尽くした一人が、故・西馬孝夫さん。長男は幼い頃に急性肺炎にかかり、使われた解熱剤の副作用で難聴になった。「恐怖に襲われ、ぼうぜんと戸惑う私たち。聞こえない、言えない、わが子を見るたびごとに、この子の行く末を案じ、途方にくれてしまいました」。西馬さんはそう手記につづっている。

悩む親子の家を西馬さんらは口づてに訪ね歩いた。障害を知られたくないからと追い返される家がある一方、「よくぞ聞いてくださった」と涙で訴える親にも出会ったという。

「障害児者に対する差別や偏見がない、住みよい社会にしていくには映画の力が必要だ」と感じた西馬さんは、ろうあの夫婦が戦争末期から戦後までを生き抜く映画「名もなく貧しく美しく」などを撮った松山善三監督に直談判した。

76年制作の「泣きながら笑う日」は、難聴の子を持つ坂本九さんと大谷直子さん演じる夫婦が、難聴児の一貫教育をする福山にたどり着き、苦闘しながらも前を向いていくストーリー。約8千万円の制作費は市民らからの寄付で賄った。当時の皇太子ご夫妻も作品を鑑賞し、広く反響を呼んだ。

40年前制作 運動への思い託した映画上映

西小と城北中の難聴学級の担任を36年間務めた堀江時子さん(73)は「当初は互いの意思疎通もままならず大変でした」と話す。補聴器や口の動きで話を読み取る読話に慣れるうち「教室がにぎやかになってうれしかった」。学校行事などで健聴の子どもたちと交流し、互いを思いやる気持ちも育んできたという。

西馬さんの長男で福山市職員の弘基さん(52)は社会人になってから、難聴児教育の確立に父が奔走したことを知った。「難聴学級がなかったらコミュニケーションが取れず何の勉強もできなかったと思う」と振り返り、「この学級はおやじの遺産。全国一と伝えていきたい」とする。

◇ ◇

式典は22日午後0時半、県民文化センターふくやま(東桜町)で。西馬弘基さんら難聴学級卒業生の体験発表や「泣きながら笑う日」の上映などがある。実行委員長の池口義人さん(84)は「半世紀前に親たちが一生懸命に頑張って今があることを知ってもらえたら」と話している。問い合わせは西小の事務局(084・922・0026)。

(広津興一)

福山駅前であった「泣きながら笑う日」のロケ=いずれも福山市人権平和資料館所蔵

西小（福山）難聴学級が半世紀

児童取り巻く環境向上

教員のスキル継承課題

福山市西町の西小の難聴学級がことし、開設から50周年を迎えた。機器の進化や医学の発展を受け、児童を取り巻く環境は向上。一方で、学級を担当する教員のスキルの継承が課題となっている。

「ここまでノートに写しましょう」。教員の指示が、特殊なマイクを通じて児童の補聴器に届く。同小の難聴学級の一つ、6年3組の国語の授業。児童2人が宮沢賢治の童話を音読し、感想を話し合った。教員の音声を補聴器に届けるFMマイクを活用している。

同小の難聴学級は1966年、県内で初めて設けられた。現在、各学年に1組あり、13人が所属。体育や音楽の授業、学校行事では難聴学級以外の児童と過ごす。6年の石岡麻衣さん(11)は「たくさんの友だちと一緒に遊んだり、勉強したりできて楽しい」と話す。

学級の歴史が半世紀となり、スキルを積んだベテラン教員が増えた。難聴学級の担当が10年近い坂本佳子教諭は「時間をかけて次世代の専門性を高めたいが、難しい」と話す。経験や専門性が求められる一方で、若手は数年たつと転勤する。

西小では教員向けの研修や、言語聴覚士による講話を定期的に実施。難聴の子どもへの接し方などを伝えている。市教委は「教員のスキルアップのため、専門家や講師の派遣の際にはサポートしたい」と話す。

22日午後0時半からは、県民文化センターふくやま(同市東桜町)で、開設50周年の記念式典がある。難聴の子どもを育てる夫婦の姿を描き、福山市で撮影された映画「泣きながら笑う日」の上映もある。式典の実行委員会事務局は西小☎084(922)0026。

西小の難聴学級で国語の授業を受ける児童

クリック

福山市の難聴学級

1966年、保護者の要望を受け、西小に県内で初めて開設された。70年に城北中、72年に西幼稚園にも開かれ、一貫した教育環境が整えられた。

難聴児教育発展を

学級開設50周年　福山で記念式典

福山市難聴学級開設50周年などを記念する式典が22日、県民文化センターふくやま（東桜町）で開かれ、卒業生や関係者ら約710人が節目を祝うとともに、難聴児教育のさらなる発展を誓った。

池口義人実行委員長（元同市教育長）が「子どもを思う先人の熱意で学級は開設された。卒業生は立派な社会人に成長し、今の子どもたちも胸を張って学校生活に励んでいる」と式辞を述べた。

城北中難聴学級の卒業生3人が代表として体験発表。1979年卒の西馬弘基さんは「学級で多くの先生や仲間と出会えた。開設運動に奔走してくれた父や母にも感謝したい」と話した。75年卒の田中康弘さんは「後輩には自分に何ができるか前向きに考えて将来の夢に挑戦してほしい」、98年卒の寺本佳代さんは「学級の先輩方の活躍が自分の人生の励みになってきた」と述べた。

卒業生らが節目を祝った福山市難聴学級開設50周年記念式典

難聴への理解を広げようと福山市民が委員会を組織し、76年に制作された映画「泣きながら笑う日」も制作40周年記念で上映された。

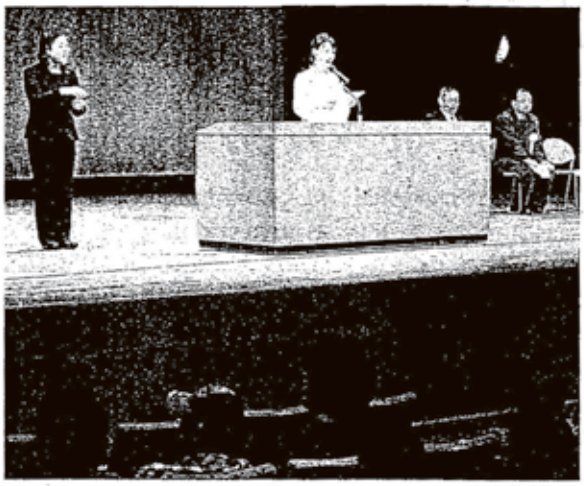
同市では66年に西小に県内初の難聴学級を開設。70年に城北中に、72年に西幼稚園に開設されるなど、一貫した教育環境が整備されてきた。

（舟越俊司）

讀賣新聞
2016年(平成28年)10月23日(日曜日)

難聴の子 支援学級50年

福山 記念式典に500人



難聴学級での体験などを話す寺本さん(左から2人目)ら(福山市で)

福山市に県内初の難聴学級が開設されてから今年で50年を迎え、記念式典が22日、同市の県民文化センターふくやまで開かれた。卒業生の発表や10周年記念に制作された映画の上映会などが行われ、約500人が出席した。

市は、1966年に市立西小に難聴学級を開設して以降、70年に城北中、72年に西幼稚園に難聴学級を設けるなど全国に先駆けて一貫した教育体制を整備。76年には、坂本九さんらが出演し、福山を舞台に難聴の子供と両親の絆を描いた映画「泣きながら笑う日」を制作。先進的な取り組みを広く伝えてきた。

この日は、城北中の卒業生が学校生活を振り返った。映画のモデルにもなった同市職員の西馬弘基さん(52)は「難聴学級で学べたおかげで今がある」と感謝。作業療法士の寺本佳代さん(34)は「先輩たちの存在が励みになった」と話し、会社員の田中康弘さん(59)は「協調性や問題解決能力を高めることができた」と述べた。

出席者たちは聴覚に障害を抱えていても楽しめる演奏を披露する「音楽感受合奏団」のコンサートなども楽しんだ。

2016年（平成28年）11月2日（水）　中国新聞

難聴学級50周年祝う

非常勤職員
桑田　明弘　39歳

広島県内で初の難聴学級が福山市の西小に開設されて50周年を迎えた。その記念式典に難聴学級卒業生として出席した。

「難聴の子に言葉を」との保護者の声を受けて西小に難聴学級が開設され、1970年代には城北中、西幼稚園にも開かれ、福山市内で一貫した教育環境が整えられた。その歴史を式典の中で初めて知り、50年の歩みを感じた。

難聴の子どもを育てる夫婦の姿を描いた福山ロケの映画「泣きながら笑う日」（1976年）も上映された。

母親が一生懸命、子どもに言葉を教える印象的なシーンがあった。発音練習を一緒にやって初めて言葉をしゃべった幼い私と、それを喜んだ両親の姿が重なって見えた。

親や先生たちに支えられて言葉を覚え、いろいろ学んで社会進出ができたことに改めて感謝した。

私が在校した頃にはなかった手話通訳を取り入れるなど、難聴児の学びが広がる難聴学級のこれからの発展を祈っている。（福山市）

ふくやま福祉だより“ほほえみ”２３２号【2016年（平成28年）11月30日発行】

“福山市難聴学級開設50周年”“映画「泣きながら笑う日」制作40周年”記念式典を開催

10月22日(土)、福山市難聴学級開設50周年・映画「泣きながら笑う日」制作40周年記念式典が、広島県民文化センターふくやまにおいて参加者約530名のもと盛大に開催されました。

当日は、全国に先駆けて難聴学級が開設された西小学校の児童による合唱、城北中学校有志による城北太鼓のアトラクションの後、福山市長、福山市議会議長をはじめ多くのご来賓の方々をお招きし開会式典を実施。

終了後は、難聴学級を卒業し現在社会人として活躍している３名の体験発表や、難聴の方と健聴の方が一緒に音楽を楽しめる「音楽感受合奏団」による演奏、福山市を舞台に先駆的な難聴教育を全国に発信しようと制作された映画「泣きながら笑う日」の上映と盛沢山の内容で実施されました。

福山市の難聴教育に取り組まれた先人達は幾多の困難がありながらも、子どもたちを支え・励まし・乗り越えてこられました。この50年はそうした歴史であり、現在の私達に大きな教訓と足跡を残していただきました。この式典を契機に、福山市の難聴教育について、福祉や教育について一層のご理解とご協力をお願いいたします。

なお、社協では、各地域やご家庭などで“映画「泣きながら笑う日」”をご覧いただけるようDVDの貸し出しをしております。ご希望の方はお気軽にお問い合わせください。

【問い合わせ先】社協 総務課
電話(084)928-1330　FAX(084)928-1331

福山市難聴学級開設５０周年・映画「泣きながら笑う日」制作４０周年記念式典
アンケートに寄せられた感想・意見（一部抜粋）

1　オープニングについて

- 西小児童も城北中生徒もよく練習されよかったです。
- 難聴学級を持つ小学校，中学校の生徒としてこれからもがんばってほしい。
- 子供たちみんなが頑張ってよかったです。
- 城北中の力強い演奏が素敵でした。
- 西小の子供たちのコーラス。心を洗われるとても素晴らしいハーモニーでした。
- 小学生の皆さんの合唱，うたっている顔を見ていると声が聞こえてくる気がして感動しました。城北中の太鼓はとても素晴らしかったです。
- 素晴らしい歌，太鼓の演奏でした。心が一つになって力いっぱい頑張る姿に涙が出るほど感動しました。
- 西小５・６年生児童が大きく口を開けて一生懸命歌っていました。城北中太鼓はそろって迫力があってよかった。
- 小学生，皆さんの大きな声，生き生きとして声に感動しました。中学生，皆さんの躍動感あふれる演技，演技中の笑顔が素敵でした。小中学生皆さんが一生懸命練習されていることを感じました。
- 美しいハーモニー，力強い太鼓の演奏でした。一生懸命な姿がすごくよかったです。
- 指揮を見つめ心込めて発声されていた姿，姿勢よく力いっぱい太鼓を叩かれる姿にとても感動しました。
- 手話で子供が挨拶したのはとてもよかったと思います。歌も大きな声で素晴らしかったです。手話つきの歌があってもよかったかも。太鼓は迫力があって気持ちがよかったです。
- 後輩達の太鼓を叩く姿に胸が熱くなり泣きそうになるくらい感動しました。自分たちにはそういう経験がなかったのですが，正直私もやりたかったです。

2　体験発表について

- しっかりした話しぶりで思いを聞かせてもらいました。
- 感心しました。体験がためになります。
- 皆様それぞれの葛藤や得てきたものを聞けてよかったです。
- ３人の皆さんの苦労や苦悩を乗り越え周りの人たちに助けられ，努力を重ね，今の自分を見つめられ，周りの人たちに感謝され，しっかりと生きてこられ，これからも前に前に歩んでいかれることを願っています。
- 幼少から日々生活していく中で苦しいこと，辛いこと，様々なことがあったと存じますが，力

強く生活して来られたこと，とても感動しました。私自身もっと頑張らなければならないと感じております。

- 小さな子供との出会いが今は社会人となって自分を素直に受け入れどんなにか苦しいこと悔しいこと，涙もいっぱい流したでしょう。でも，前向きに生きようとしている姿が見られてうれしかったです。
- ３人のお話，とてもよかったです。大人になって仕事をする上でも仲間との協調性や積極的に回りに知ってもらうことも大切だと思いました。
- 学校で学んだことや家庭での支え，経験したことを糧に自分から工夫して周りに働きかけて道を切り開いてこられた姿に感銘を受けました。
- 親の立場で体験者の方の親御様を同じ立場で想像しながら聞きました。ご本人様も親御様も素晴らしいです。３名の方がいろいろ苦労をされた話を聞き，立派な社会人になられたことをうれしく思います。
- 前向きな姿勢を見習わなければと思いました。
- ３人の方それぞれのお話が伺えてよかったです。ご苦労もあったでしょうにあまり大変さを語らず，さわやかでした。社会に出てご活躍の様子，嬉しく励みになりますよね。
- 皆それぞれ，どこか妥協しなければやっていけないところがあるのではないでしょうか。私も妥協しながら生活できるようになるまで悩みに悩んだ覚えがあります。心が壊れる前にどこかで区切りをつけないとやっていけないような気もします。西馬さんのことがモデルとは知らず，でも，やっぱりどこの親もそういう苦労をしてきたのだなと感謝と尊敬の一言です。

３　音楽感受合奏団「もりのおとぶくろ」について

- 分かりやすいとても美しいことばを感じました。
- 絵本の朗読に音楽を合わせてよかったです。
- 心が温かくなる演目。そして演奏が入る絵本の読み聞かせを体験させていただきありがとうございました。引き込まれました。
- 映像と演奏の連動が素敵でした。ありがとうございました。
- こんなに素晴らしい演奏が聴けて，聴覚障害者だけでなく，これからは高齢者もこういう形で音楽感受合奏が聴かれたら，どれだけ分かりやすく楽しめるかと思います。また，聴いてみたいと思います。
- 私の勉強不足で初めて研究所，合奏団のことを知りました。皆様の活動がもっと広く社会に認知され，ますますご活躍されることを祈念致します。聴覚のバリアフリーが一日も早く訪れることを希望します。
- 絵本と音楽が融合した素敵なプレゼントでした。
- 私はあまり音楽を聴くことがない。ひさしぶりに聴いてよかったです。
- このような合奏団があることを知らなかったので，知られただけでもとてもよかったと思います。物語が始まる前にスクリーンに演奏している楽器の名前が場所，大きさもわかるように映

されていたのはよい工夫ですね。
- 中には聞こえなくなった人も聞こえにくい人もいるのだから，長く，たいくつだったかな。
- まったく聞こえないと正直楽しめないです。聞こえる子供たちには素晴らしそうでした。

4　映画「泣きながら笑う日」について

- 何度も死のうと思う親の気持ちに応える生き方をしたいものです。
- ５回以上見ました。枝廣市長も見ていなかったそうで，まだまだ知られていないのかと思いました。
- 親の気持ちがよく分かりました。
- 今は手話が普通に使われているのに，口話法での教育しかできなかったのが不思議です。
- ４０年ぶりに観て，何回観ても感動します。
- もう４０年もたったのかと月日の速さに驚きましたが，４０年前の気分に戻ることができました。
- わが子が自閉症なのですが親としての苦しみや名前を呼んでほしい気持ちは同じだなあと思いました。
- 想像したのとずいぶん違っていましたが，両親の心の苦しみがすごく伝わりました。
- あらためてすごく深い内容を感じました。感動です。俳優さんも素晴らしい人ばかり。今はもう亡き人も多いので演技に感動しました。
- 現代よりさらに障がい者についての理解が少ない社会を生きていく中で，障がいを持った人のご家族，親御さんの苦悩を知った。私たちが障がいを持った人たちのお手伝いが少しでもできるようにしたい。
- 人間の弱さ，強さ，優しさがビンビン伝わってきました。
- 改めて字幕付きの映画を観て，１年生のときには分からなかったことが分かりました。それまで坂本九さんが演じる父親はどれだけ暴力的で野蛮なんだろうとしか子供心に思えませんでした。字幕は付いて初めて内容が分かり不器用で優しい人なんだと思いました。

5　全体的な感想・福山市の難聴教育について

- 回りの私たちの課題と思います。
- 教育はありがたい。
- 何も知らず，その立場の人の気持ちが分からなかったが，少し分かった。
- 児童席の確保はしておいてあげた方がよかったのでは。一般の人との区別が分かりにくかった。
- この場に来られてよかったです。本当にありがとうございました。
- 高校を出て附属ろう学校の歯科技工科へ入りましたが，そこで手話を知りました。小・中・高と難聴学級でそれなりにうまくいっていると思っていましたが，手話を知ると世界がガラッと

変わりました。コミュニケーションが本当にとれてなかったんだと思いました。

- 子供たちにとってとても厳しい時代でしたが，社会人として生きてほしいという願いはみんな同じでした。昭和 49 年に子供たちとの出会いが始まり，自宅を離れ仕事もやめて福山の難聴教育に大きな期待を持って転入してきた保護者に，手探り状態の私は時には押しつぶされそうになったこともありました。体と心でぶつけあいもしました。でも，今の姿を見ることができ一生懸命全力で保育してきたことが私自身の誇りになりました。どうぞ弱者にやさしい人になって自信をもって過ごしてください。
- 引き続き頑張ってほしい。知らない人もいるのでもっと知る機会を作ってほしい。
- とてもよい会だったと思います。内容盛り沢山でなんだか元気をもらいました。福山市の就学前から中学校まで一貫した難聴児教育制度は改めて素晴らしく，いつまでも続いてほしいと思いました。会が始まっても手話で話している方がたくさんおられましたが，懐かしい友にあって話したくなるのは分かるので，会が始まる前に卒業生交流会などをもたれたら良かったのかも。
- 今は手話を使うことも許され，時代にあった教育もされていて親も安心して学校に通わせられるのではないでしょうか。一人ひとり性格も考え方も違う人たちの集まりなので十人十色の悩みもあると思いますが，その分長所もあるはずなのでみんながんばっていってほしいと思います。そして，疲れたらどこかで先輩達を頼ったりしてほしいと思います。難聴学級のおかげで私も成長できたので，いろいろと思い出されて本当に参加してよかったと思います。

1966年（昭和41年）4月　西小学校に県下初の難聴学級設置

「難聴の子供達のための学級がほしい！」との強い親の願いに応えて，広島県で初めての難聴学級が設置されました。

難聴学級開級式

公開授業

1981年（昭和56年）授業の様子

分かり合う集会

2017年（平成29年）電子黒板を使って授業

1970年（昭和45年）4月　城北中学校に難聴学級設置
小学校に続き設置され，広島県で初めて小・中一環の難聴学級が設置されました。

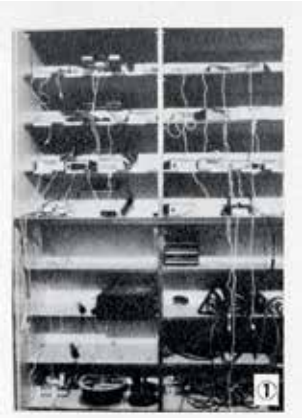
▶難聴教室で学ぶ生徒

「思い出のテープ」に卒業前の決意などを吹き込む城北中難聴学級の三年生たち

喜びも悲しみもこのテープに

思い出を声で収録

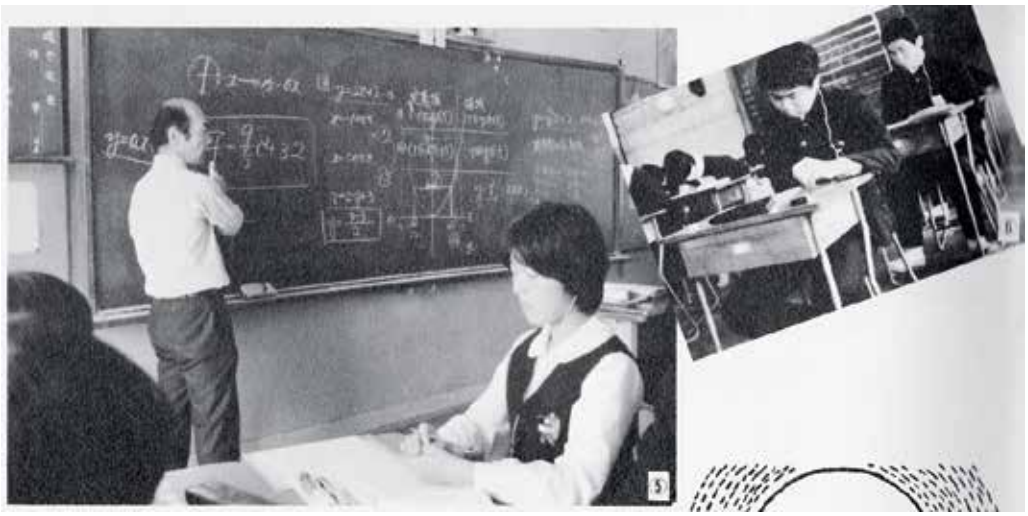
福山城北中 難聴学級の3年生



補聴器の充電

聴能訓練室で個別指導

難聴学級での授業



1977年（昭和52年）普通学級での共同授業

1972年（昭和47年）4月　西幼稚園に難聴学級設置
　幼稚園にも難聴学級が必要との声が高まり設置に至りました。それまでは，小学校の宇根亥佐男先生や堀江時子先生が土曜日に幼稚園の一室でことばの指導をされていました。初代の担任は松本育子先生。

1972年（昭和47年）保育風景

1975年(昭和50年)2月
難聴学級教室を新築

2006年(平成18年)4月
西小学校南校舎を改築し移転

1973年（昭和48年）保育風景

直接体験を大切に
～どろんこあそび～

全体の場では
手話などで話を補足

電子黒板を用いての指導

個別指導
（話し合い活動）

『難聴学級はこうしてできた』
（あなたの町にもできる）

難聴児親の会
西　馬　孝　夫　さん

物心のつきかけたこの一子から，言葉が聞けない…不安と焦燥にかられながら，わが子を抱きしめＨ耳鼻科を訪れました。

検査，診療の結果，医師からかえってきた言葉は，「難聴」です。この冷酷な一言，「この子どもさんは，ハシカ，そのほか高熱を出して強い注射（マイシン系）をした覚えは？……もし，その注射をしていれば，それが原因だと思います。この注射は，抵抗力のない幼児の場合，身体の一番弱しところ，つまり耳に災いしたのです。神経が侵された神経難聴で，今の医学では，どうすることもできません」

僅か一本か，二本の注射で，「難聴」の烙印を押されたわが子。恐怖に襲われ，呆然と戸惑う私達。

聞こえない，言えない，わが子を見る度ごとに，この子の行末を案じ途方にくれてしまいました。

たとえ医学では治らないと言われても，あらゆる大学病院へ東奔西走したり，また時には神頼みと，いろいろの手段を尽くしましたが結果は同じでした。では，どうすればよいのか，これ以上すべきことは…。

再び訪れたＨ医院，そこで解決のための方法について助言を受けました。それは，まだ数少ない難聴指導の設備のある施設に行くか，自分の手で，この福山市に難聴学級設置を訴えるか？，二つに一つ…。

まだ，福山市に転居して一年足らずの私たちに，簡単に職をかえ，再び転居することは容易ではありません。ではどうすれば…　どこへ訴えればよいのか…　暗中模索の中で，ふと思い出しました。それは，あるサラリーマンが，自分には，何の関係もない肢体不自由児の施設づくりに自分の一生を犠牲にした映画「われ一粒の麦なれど」の冒頭に，「一人では何もできぬ，しかし，まず一人から始めねばならぬ」という岸田国士の言葉にとりつかれたのです。

この映画の主人公のように運動を起こそうと決意した私たちは，Ｈ医師の協力を依頼，さらに，私たちの悩みを開き，自分ごとのように率先協力を申し出られたＡ市議会議員とともに，1963年（昭和38年）６月に，難聴学級設置運動を起こし，同じ難聴で悩んでおられる親子の家を口づてに尋ね歩くことから始めました。

訪ね歩く中で，障害を知られたくない一念から，「そんな子供は家にはおらん，かえれ！」と塩をかけられ，話を最後まで聞こうとはしてくれない親，家の慶びごとに差支えると押し問答が続き，

果ては追出される始末です。この人たちの気持ちは，痛いほどわかります。でも，難聴学級づくりには，一人でも多くの人が，名乗りをあげてくれなければできないのです。何日も歩き続ける中で，ある家庭では，「よくぞ聞いてくださいました」と土下座され，涙で訴えられる親の姿に接しました。

歩き続けてよかった…　これまで幾度か挫折しかけた心に，再び，勇気と自信が湧いてきました。

この苦難な努力が約一年も続き，ようやくその願いが実り，1965 年（昭和 40 年）11 月難聴児対策が，初めて福山市議会に取あげられました。

答弁に立たれた教育長より「難聴学級設置問題は，たび重なる陳情，親の熱意で，教育を預かる身として来年度必ず実現させる」という決断の言葉を聞いたのです。この言葉を聞いた親達は，傍聴席を外し，廊下で，声をあげて感泣しました。

難聴学級設置の動きが全国に報道されるや，遠隔地よりの問い合わせが市に殺到し，市内でも，一人増え，三人増えてまいりました。開設校が内定されると，地域（PTA）に理解を呼びかけ，夜遅くまで，集会をもち，時には，各家庭にも足を運んだこともあります。

これまでの道のりは，決して安易な道ではありません。雨の日も風の日も，市役所通いと，苦しかったあの夏の容赦なく照り続ける太陽の下，A 議員と古ぼけた自転車を押し，途中で自転車が故障して困り果てた時，「なぜこんな苦労までせねばならぬのだ，施設のある都市を探して，自分だけで行こう」と，何度思いつめたか知れません。しかし，心の支えの，「ひとりでも…」の言葉に励まされ，「必ずできる」「作るのだ」の信念を持ってあたったことで道が開けたのだと思います。

1968 年（昭和 43 年）には，親たちも増えましたので「難聴児親の会」が結成され，会長を中心として組織的な運動を続け，まず親自身が強くならねばと，学習をつみあげたり，難聴学級整備の運動を活発に続けてきました。

だからこそ，全国に類のない，保育所，幼稚園，小学校，中学校，高等学校と一貫した制度を確立させてきたのです。これは，親が心を一つにして，全部の子どもたちの幸せを一途に，助け合い，励ましあっての集大成なのです。

「あなたの町にもできる」これは夢ではありません。まず一人から始めて，最後までくじけず頑張り通す信念と，多くの人々に理解をしていただくことが，必要条件だと思います。時には，人にも言えず，運動に走りすぎて，本業を忘れ，非難を受ける者もありました。でもそれをのりこえ，まず職場や周囲の方々の理解を得られるように自らが進んで働きかけることが一番大切なのだということも学びました。

難聴学級施設が年々整備されてきています。もちろん運動が中心となって，行政を動かしてきたこともありますが，多くの福山市民が難聴児に対して，また他の障害者にも，「福祉」そのものについて理解が深められたことにたいへん心強さを感じました。

とりわけ難聴学級がある学校の PTA 会員，地域住民の方々が，いろいろな学校行事を通して難聴児との心のふれあいに協力くださることは私たちは胸が暖かくなる思いがします。これから私達も，自分たちだけのことではなく，広く，他の障害（児）者対策に，ともに歩み，「心の窓」を聞き，「福祉」の渦を大きく推進する力になろうと思います。

【1975 年（昭和 50 年）4 月】

『心を育て，ことばを育てる』
～他とかかわり合って生きる力を～

元難聴学級担任
堀　江　時　子　さん

1．はじめに

この福山の地で，難聴学級が西小学校にできて２年目，1967 年（昭和 42 年）に一年生５名を担任したのがスタートで，14 年間西小，城北中学校に転勤して 19 年間，再び西小で３年間，合計 36 年間も難聴学級を担任した。その間出会った難聴の子どもたちは何人になるのだろうか。退職して 13 年だから，最年長は 59 歳。この子（人）たちを通して親たちや教師たちともつながっていたわけだ。退職後は，幼・小・中の難聴学級に在籍していて希望される子と放課後一対一で指導に当たる言語訓練教室を担当している。こうして振り返って感じるのは，一つことを長年やってくることができた幸せだ。

皆さん方と，私が担任していた時代が重なるのは，わずかな期間でしかない。その意味では，子どもたちや皆さんを取り巻く環境も違っていて，私がこれからお話しすることは皆さんの役に立たないのではないかと心配だ。

なぜ私が，これしかないかのように難聴児教育に関わってきたのか，皆さんも不思議に思われるのではないだろうか。私自身，難聴で，少人数相手に授業するのがやり易かったから――こういうと身もふたもないことになってしまうのだ……。

今日のテーマ『心を育て，ことばを育てる』は，私自身の強い願いでもある。

終戦２年前に福岡で 10 人兄弟の末っ子として生まれた私は，栄養失調で体も弱く，足腰が立たない時期，目の見えない時期があったようで，２歳つまり終戦の年に中耳炎を患い，毎日のように通院したが，今のように有効な薬もなく，慢性化し，小学校入学の頃，やっと耳垂れが止まったと聞いている。聞こえにくいが，耳の後ろに手を当てて聞けば何とか聞こえるし，近所の子どもたちとも遊びほうけていた。

2．補聴器は私を開いてくれた

ところが，小学４年の時，父が亡くなって，県北の三次へ転校したことから事態が一変した。みんなの話し言葉が変，自信のあった国語の本読みでも，クラスの子も先生も笑う。ショックだった。何よ，みんなの方こそ変な話し方じゃないの，と遠くから転校してきた者にしかわからない違和感を持った。方言が違う，アクセントがちがう。今のようにテレビが普及していたわけでなく，転校

経験のある者にしかわからないことだったのだろう。先生までも笑うなんて！と内心憤慨していた。方言も分からないし，よく聞こえない。担任に「近くの子だから，一緒に登校しなさい。」と紹介された子の話が聞き取りにくく，分かりにくいので，時間をずらして一人で登下校した。

休憩時間，なんとなく友達の輪ができて，おしゃべりを楽しむ。私にはそれがつらかった。あっちからもこっちからも声が飛んでくるから大変。声のする方を向いて懸命に聞くのに，子どもの話は感情が込められていて，大きくなったかと思えば突然秘密めいて話される。（ああ言ったのかな？）（こう言ったのかな？）と首を捻っても確かなことはつかめず，何度も聞き返すと露骨に嫌な顔，「えっ？」と言う顔をされるから，適当に相槌を打ったり，生返事をしたり…と，今思い出しても苦いものがこみあげる。子どもなりに気を遣っていたのだ。

それで，友だちとわからない話をするより，図書室にばかり行くようになった。本を読んでいるときは，自分が聞こえないことなど忘れておれるし，第一面白い。友だちを見ていても心の動きはわからないが，本は文字で分かるように表現してくれている。ここでは自分が生きておれる。ことばは自然に広がっていったようだ。

それと比べると，授業はまだよかった。正面を向いて話が聞けるし，黒板の文字も教科書も，手掛かりになるものがたくさんあるから。耳の後ろに手を当てて必死で聞いていた。聞こえる人に負けるのが悔しくて，家に帰ってからひとりで一生懸命勉強したので，テストでは負けなかった。でも，例えばこういうことなんだというような現実の生活，世界と結びついた面白い話などは聞こえてないので，本当には楽しい勉強はできなかったし，テストでは通用した知識も，時間が経てば水が流れ出すように頭から消えていく。

中学２年の時，担任の勧めで専門医の診断を受けた。慢性中耳炎による難聴と認定され，障害者手帳と補聴器の交付を受けたのだ。初めて補聴器をつけた時の感動は，今も覚えている。家にたった一人でいるとき，そっとつけてみた。柱時計のコチコチ時を刻む音，水道の蛇口から滴るポタンポタンという水の音，家の外で鳴くカエルの声，子どもたちの声…身の回りにはこんなにもいろんな音が渦巻いているのか，一度に私の周囲が生き生きと動き出したのだ。もううれしくて，音楽の本を取り出して歌ってみた。（私っていい声してる！）国語の本を音読して（うまい！）と思った。――補聴器は自信をつけるのに役立った。学校にも喜んで持っていった。授業中，そっとつけると，先生が耳元で話しているかのようにはっきり聞こる。でも，当時の補聴器は大きく箱型で，コードが垂れていたからだろう。好奇心いっぱいのクラスの子どもたちが見逃すはずがない。休憩時間にワッと寄ってきて，次々にイヤホンを耳にしては，「わっ，すごい！」と大騒ぎする。

教師になってからは，この時のこの場面を，「私のことを理解してもらえる絶好の機会だった」と悔やんだのだが，自分の他に聞こえにくい人がいることも知らない，他の人の補聴器を見たこともないあの頃の私にとっては，恥ずかしいばかりだった。　とうとう学校へ持っていくのをやめ，一番前の席で先生の顔を見ながら授業を受けた。声の小さな先生，生徒の机の周りを歩きながら教科書を読んだり話したりする先生の教科は，ところどころしか分からず，分かったところをつなぎ合わせて理解しようと必死だった。考えている間にも話はどんどん進んでいくわけで，それは聞き落してしまうもの

だから，結局，何がどうなっているかはよくわからない。自分はどう考えるかを問う間もない。ただその場にいて席を温めているだけの学校生活だった。

友達と心の底から話せない寂しさ，何が何だかわからないまま過ぎ去っていく日々の空しさを埋めようとしたのだろうか。唯一確かなもの，不安にとらわれないでのめり込めるものとして，広告でも何でも目に入る文字，文章を読み漁った。でも。これは生きた世界ではない。現に自分を取り巻くクラスの人たちの気持ちは何もわからなかったし，自分自身を見つめて書き綴ることもしなかった。干からびた世界でやっと息をしていた自分の姿が見えてくる。

それでも青年時代は夢を持つ。高校卒業時，物事が曖昧でよくわからないのに，なぜか教師になる夢，それも障害を持った子どもたちの教師になりたいという夢を持った。10 歳で父を亡くし，経済的にも苦しかったが，私の夢を母も兄もつぶさないでいてくれた。大学入試から補聴器を付けて人前に出た。自分の力が試される時だからだ。それまで周りの人たちに助けられていたことにも気づかないでいたのだが，補聴器は私を開いてくれた。人の話を聞いていなかった高校までの私は，人や物事を見た目で判断していた。ある行動の裏に隠されたその人の思いなど，想像することもなかったと思う。そのことを教えてくれた。

大学に入って，特殊教育課程聾教育専攻の学生６名，そして寮の先輩・後輩・同級生 20 名ぐらいという小集団を意識した。補聴器を付けているから，ひとりひとりの個性も考えも彩りを持ってわかってくる。授業も少人数で，胸がどきどきするような魅力のあるものだった。聞こえるってすごいこと！と感動し，反動で劣等感にさいなまれた。周りの人たちが自分の考えというものを持っているのに，私はそれを聞き取って「そういう考え方もあるのか」と目を開かされた想いをするだけ。私には自分の考えというものがない。周りばかり気にして，深く物事を考えるということをしなかった自分が見えてきて恥ずかしかった。寮で夜遅くまで読書。自分の考えというものを持ちたくて，眠くなるのも，おなかがすくのも，「何でよう！私には時間がないのに…」と悔しがっていた。でも，とにかく安心して話せるようになって，初めて親友ともいえる友達に巡り合った。

心ゆくまでおしゃべりを楽しめるようになった私は，それのできなかった頃の私と同じような，何でも話せる友達がいない，親や周りの人がどんなことを考えているかもわからない，そんなさびしい子ども時代を過ごさせたくないという思いで，やっぱり教師になろうと決意を新たにした。

これは付け足しだが，私の耳は高校２年生のころから悪い方向に向かっていた。鼓膜が破れたままになっていたため，耳小骨が細菌に感染し，真っ黄色の膿となって耳の穴から流れ出したのだ。大学入学後，耳鼻科医の診察を受け，このまま放っておくと，膿が脳まで達して脳膜炎になって何もわからない植物人間になるか，死んでしまうと宣告された。手術をすれば，聴力は落ちるが命は取り留められると。もちろん手術をお願いした。傷んだ耳小骨二つを取り除き，脚の皮膚を鼓膜代わりにつけるという「鼓室形成術」。今では両耳に補聴器を付けているが，これ無しでは人の話はほとんど聞こえない状態だ。

大学卒業後，１年間神石の小学校で２年生の担任として教師の道をスタートした。15 人の子どもたち。１学期は，夜，授業準備を精いっぱいやったのに，朝になると不安で，学校への道々涙がこぼれ，校門前で涙をぬぐっていた。でも，教室に入ると，明るく生き生きした子どもたち，授業も楽しく，帰る道はスキップ！それなのに次の日はまた涙。夏休み，高校の同窓会で私は，子どもたちのこと，分からないことが山ほどあることを必死で語った。その時，『堀江さんの声を初めて

聴いた。先生になってよかったなあ。』と声をかけられ，ハッとした。何を考えているのか周りの人にはわからないぐらい大人しく，ひっそりしていた私が，熱を込めて語るということは，それだけ自分の命を輝かせているということなんだと教えられたのだ。びっくりした。

２学期からは，胸を躍らせて学校へ向かった。“補聴器を付けた先生”というのは，親にも子どもにとっても初めてのことで，戸惑いもあっただろうが，子どもたちははっきり大きな声で話してくれたし，学校が楽しくて，“私は生きている”と感動さえしていた。

その時の同僚の教師に，「障害児教育をしたいという気持ちがあるのなら，早くその道に入るべきだ」とアドバイスを受け，西小難聴学級開設２年目に担任として赴任したのだ。

３．難聴学級を担任して出会った子どもたち

難聴学級で担任した子どもたちは，私が思っていたよりももっと大きな問題を抱えていた。生まれた時から聞こえにくいという障害を持っている子がほとんど，補聴器を付けてもきれいな声に聞こえなくて，聞きづらいのを何度も何度も聴く練習をすることでことばが聞き取れるようになっていくこと。まだ幼児教育の場がなかったので，聞こえる親と聞こえない子が意思疎通できるようになるまでに何年もかかる。発音練習もいる。耳を鍛えることで発音が明瞭になっていく子もいれば，それは無理で，口の形，舌の動き，息の出し方など発音の仕方を細かく根気よく訓練することで分かってやれるような発音になる子もいる。ことばも遊びや生活を通して丁寧に教えてあげればわかるようになっていく。もう夢中だった。交流学級の子どもと一緒に遊んだり話したりする姿が見られるようになったのは，かなり後のことだ。

自分と同じ難聴の子どもが何人もいて，自分より年上の先輩も年下の後輩もいる。同級生とは“聞こえない”と気にしなくても話せるし，遊べる。分かり合える。心から遠慮なく笑い，喜び合える。困った時の相談もできる。同じ障害を持つ先輩たちも堂々としていて，中学生，高校生になっていく。大学に行く人もいる。働く人もいる。結婚して子どもを育てている人もいる。自分もあの人たちのようになりたい，と希望を持つことが出来る。私は，この難聴学級の人たちの心をつなぐことを一番大事にしたいと思ってやってきた。日記を書かせ，学級通信に載せて読みあう取組も，自分たちの心の成長を見つめ，書き綴ることで友だちとつながっていたことを忘れないでほしい，卒業後社会人になってもつながっていけるのではないか，という思いでずっと続けてきた。

４．大切にしてきたこと

①　生活を言語化するということ

子どもの自発的な表現を引き出し，それにことばを与える。自分の思いにことばが与えられると，周りの人の気持ちもわかってくる。それが書くことにつながる。文集・学級通信で子ども・親・教師がつながっていく。

難聴児の幼児教育の場がまだ調っていなかった時代。小学１年を担任した時，大休憩に子どもたちと遊んで，それを題材にことばを教えていった。そのうち，子どもたちだけを遊びに行かせ，私

は教室で子どものやってきた宿題を見ていて，子どもたちが帰って来るのを待つようにした。子どもたちは解放されてグランドに出て遊ぶ。大休憩を終えて教室に帰ってきた子どもたちは，興奮して担任に話そうとする。ことばが少なく発音も不十分，身振り手振りで遊んだことやトラブルがあったことなど懸命だ。聞き手の私は聞きながら，分かった言葉を繰り返したり，黒板に絵やことばを書いたり，身振り手振りを入れたりして子どもに確かめながら，子どもの表現を引き出していく。（～したの？）と子どもの知っている言葉を使ったりして「違う」ということばを引き出し，さらに問いかける。こうして子どもの言いたいことがわかってやれたら，その場にふさわしい言葉を教えてやる。分かってやれなかったらもう話しかけてくれなくなるのではないかと思って，一生懸命聞く。この時間が子どもも私も大好きだった。

そのうち「絵日記」といって毎朝絵を描かせる時間を取った。あったことを絵に描いて私の机のところまで持ってくる。面白かったことを引き出し，ことばに置き換え，その絵に文字を書き添えてやる。その時間を「絵日記の時間」といって一年生の子どもたちは大好きだった。話し言葉，書き言葉，文字，身振り手振り…何でもいい。表現したい，分かり合いたい，という気持ちを高めることが大事だと思う。

② 物語文（絵本）を読む

彩り豊かにイメージを膨らませながら読む。人間への関心が広がり，理解が深まる。子どもたちには読書好きになってほしい。

耳からだけの情報には限りがある聴覚障害の子どもたちだ。社会を理解し，人間を理解するのに，何もわからない状態に押し込めていては，自分の人生が生きられない。

1975年（昭和50年）ミネルヴァ書房から『わたしたちの障害児教育』が発行された。その時に「わたしにも聞こえる」と題して，私が実践を載せてもらったもののほんの一部だが，紹介する。西幼稚園に難聴学級ができた時の子どもたちが小学１年生の時のこと。

学校の本はきらい

絵本をパラパラとめくって閉じてしまう。そして次の本に手が伸びるが，これも同じこと。文字を追い，イメージを描いていけば，心惹かれる世界が広がって来るのに……。

「わたしは，学校の本はきらい。わからない！」

子どもたちは，入口のところで作品に拒否されているのだろうか。ことばに抵抗がある子どもたちを強引に引っ張り込む，そんな力を持った作品を探し出さねば。その作品のことばの形象を読み取りながらイメージを作りあげていく過程を大事にする。その積み重ねのなかで文学を読む楽しさに浸れるようになるのではないか。

子どもたちにねだられてやった市販の紙芝居は，読む私自身が途中で嫌になってしまう。粗雑な文章と道徳臭さがたまらない。これはという絵本を紙芝居風に見せながら読み聞かせをする傍ら，子どもと初めて取組む教材探しに書店をあさっていた。

『ありこのおつかい』（石井桃子作・中川宗弥絵・福音館書店発行）今まで聞いたこともない作品だったが，１ページずつ読み進めると，理屈抜きに楽しい。これだ！とうとう見つけた！平易な文，生き生きした会話語，表情たっぷりの絵。ついつい腹を立てて相手を飲み込んでしまうことも，おなかの中に入ってからでさえ不合理に精いっぱい抗議することも……。

流行性感冒により学級閉鎖が解かれて登校してくる子どもたちを喜ばせたくてガリ版に向かう。

絵は蠟原紙を絵に載せて写し取った。＜この年の１年生は，男子３名，女子２名＞
　挿絵の色塗り・難語句のとりたて指導の後，場面ごとの確かめ読みに入った。
　12 月 12 日　ジュンが首を振り振り言う。「おかあさんのいうとおりにまっすぐに行かなかったから，こわいものがでたよ。だめだねえ，ありこは！」「そうよ，いけんよ。」みんなが相槌を打つ。事柄の関係が読み取れることを知って，私は勢いづいて次へ進めた。
T「ありのありこは，何を引っ張ったの？」
　「つるくさをぎゅっとひっぱりました。」「あのね，ほんとうはかまきりのきりおだったよ。」「かまきりはおこったねえ。」
T「何と言って怒ったの？」
　「だれだ，ぼくの足をちぎろうとしたやつは。」
T「だれだったの？」
　「ありこ。ありこがひっぱったよ。」「きりおはねえ，あれ，だれかなあ，わからんよ。」ケイ子が，後ろを振り向いて捜す真似をする。
T「きりおは，何と言いましたか？」
　「なんだ，ありのこか。ちびのくせにおれにかかってくるとはなまいきだ。おまえを食っちゃうぞ。」
　みんな口々に読み出した。（なんだ…か。）（…のくせに）（なまいき）（食っちゃう）を教えると，「おにいちゃんがいうよ。」とノブオ。
　きりおがぺろりとありこを飲み込んだ時のありこを演じるタカシが抜群だった。「いやだあ，あやまったのにたべるなんて，ばかあ！」体を激しく振って抵抗し，おなかの中に入ってしまったところは，床に尻をついて足をバタバタさせ，バカ―と両手できりおのおなかを突く。ニコニコ見ていたユミとケイ子が，買ってほしいものをねだっても買ってもらえず悔しかった経験を思い出して発表したほどだ。
T「きりおが，『だまれ！』と怒鳴ったのに，ありこはどうしてやめなかったの？」
　「まちがえて　足をひっぱったよ。わざとじゃないねえ。」「ありこは，ごめんなさいと　あやまったのに　のみこんだから　わるいよ。」
T「そうだねえ。きりおは仕方なくおなかの中のありこと喧嘩をしながら歩いたんだね。」
おなかに向かって「うるさい，だまれ！」とみんな口々に言っていると，ノブオが，おなかをこぶしで叩いて「いたい！」と言っている。
T「どうしたの？」
　「きりおはね，ありこが『ばかあ』いうたから，『うるさい，だまれ！』いうておなかをたたくよ。でも，じぶんのおなかがいたいからいけんよ。」「はいらないよ。」タカシも口の中に手を突っ込む。ありこを取り出そうとするのだ。
T「きりおは強いけど，困ったんだねえ。」 子どもたちの想像力のたくましさには驚く。自分のこととして読んでいける。
T「先生は，ありこは強いと思う。自分が悪くないと思ったら，ちゃんと言っている。」 この子たちの集団は，ノブオを頂点に置き，こぢんまりとまとまってしまっている。そのことに目を向けさせたかった。

三学期には，ジー・ジオンの『どろんこハリー』（福音館書店），ロシア動物民話『うさぎのいえ』（同）を投げ入れた。いずれも長時間をかけて取組んだ。

どうしても教科書が気になる。父母は，子どもの生き生きと作品に取組む姿を見，作品にも惹かれて，こんな値打ちのある作品を自分たちも学びたい，そんな場を作ってほしいと支持してくれるが，それに徹する自信がなくて，学年末，再び教科書に戻った。

説明文「たこ」 作文「赤ちゃん」 同じ説明を何度も繰り返し，子どもからことばを無理やり引き出す。みんなの心がバラバラなのが手に取るようにわかる。子どもが悪いんじゃない，そう自分に言い聞かせてもつい…。こんな状態が続いているとき，私は子どもたちに目を覚まされた。

「先生はおこるからきらい！やさしくないよ。…（略）」

こんな作文をクラスの子どもたちに突き付けられたのである。いたずらっぽく笑っている顔を見ながら，頬の筋肉が引きつるのがわかる。やっとのことで，『大休憩だから外で遊んでもいいよ…。』と声を絞り出す。子どもたちがはしゃぎながら出て行くのを見送って，ひとり，ああでもない，こうでもないと想いを巡らす。 “もっと楽しく勉強したい。大人の権威で抑えつけないでくれ！”という要求の表現だと考えられないだろうか。そこまで考えていって，やっと私は落ち着くことが出来た。 “一本取られた”と苦笑に変えることが出来た。子どもたちの眼は鋭い。価値ある教材，そうでない教材に遠慮なく態度の差をつける。よいものには自分を打ち込む。

③　トラブルが言葉を教えるチャンス

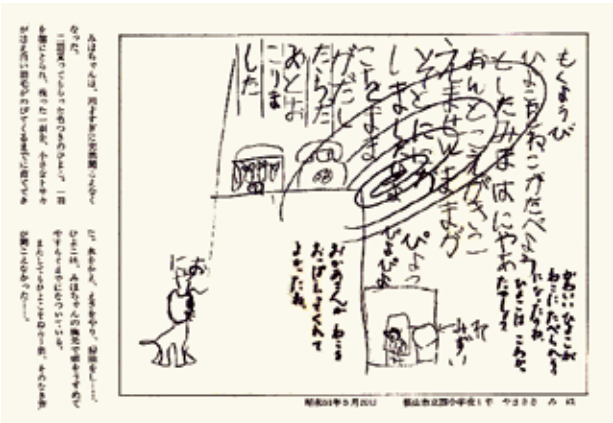
『虎の威を借る狐』に気づく

トラブルの原因，お互いのしたこと。その時の思いを事細かく聞くことも要るが，それに終始しては，結局どちらが悪かったのかを追及されているとしか子どもは受けとめられない。そこからは何も学べない。

慣用句・ことわざ・故事成語など，本質を突いたことばの持っている力は大きい。今の状況を短い言葉で表したらと…ことばで自分を律することのできる子にしたい。

幼児期からの難聴のため，度合いには差があるにしても，どの子も健聴の子と比してことばの遅れが目立つ。具体物を指す言葉もそうだが，抽象的な言葉の遅れは著しい。物事の本質をとらえねば理解できないし，自分のものとするのはかなり難しい。

難聴学級に生活母体があるということの利点を最大限生かすためにも，ことばを生活と結びつけて教えたいし，その言葉を知ることで生活のしぶりも高まったということを実感させ，自発的に新しい言葉を求める姿勢につなげたい。そのため子どもと向き合った時，その場にぴったりしたことばを教えてやりたいものだと，常日頃私は思っている。



今回登場する中学校難聴学級２年男子ＦとＧ，このクラスには他に女子３名もいた。

12月，交流学級でトラブルが発生。ある日，２年のＦがその教室に行くと，知らぬ間に席が替わっていた。そのことをＦは他の班のＧに訴えた。

ＧはＦの班の人に抗議。Ｆに相談しなかったのは自分たちが悪かった，Ｇに教えられた，と席は元に戻した。しかし，その際，Ｆの班員は担任に「Ｆ君は自分のことだから，直接僕たちに言ってほしかった」との思いを語ったという。

そのことを聞いて，学活時，Ｆに確かめると，事実だという。どうして自分で班の人に言わなかったのか問うと，キョトンとしている。今迄通り困ったからＧに話した。するとＧが怒ってくれた。それだけなのにどうして自分が注意されるのかＦには納得がいかなかったに違いない。ＧにしてもＦから話を聞いた時，「自分で抗議したほうがいい」とアドバイスすべきだった。だが，今はＦの自覚を促す時だと私は判断した。

Ｆが困っている様子を見たり，Ｆに頼られたりすると放っておけないＧの性格を知っているのでＧに訴えるということは，ＦがＧを利用したことになる。それはＧに失礼だ。こういうのを“虎の威を借る狐”という。すぐに人に頼むのでなく，自分でなんとかしてみようという“問題解決能力”をつけるべきだ。そうでないと，Ｆは“卑怯”になる。――と話した。――の言葉も取り出して，辞書で調べさせて解説した。Ｆは「おれは狐か…」と言いながらも，よほどショックだったようだ。Ｆは三学期の決意を書いている。

二学期までは，先生や友達にたよってばかりだったから，先生に「虎の威を借る狐」と言われました。三学期は，今までつけることが出来なかった問題解決能力をつけて，自分の力でぶつかってみようと思っています。ぼくはがんばります。　　（F）

三学期，体調を崩し，成長期に伴う自律神経失調症と診断されたＧは，気力も弱り，遅刻・欠席が急激に増えてしまった。そういうこともあって，Ｆは男子としては一人で交流学級の友だちの中に入っていかざるを得ない状況に追い込まれ，誰を頼るでもなく自分で事を処していくようになった。Ｆは実にたくましく成長した。

④　表意文字である漢字力をつける

音読み・訓読み・部首（意味を表す）　その漢字の意味が分かれば，二字熟語・三字熟語・四字熟語も読む道が開けるし，類義語・対義語もわかる。それらの持つ意味がイメージできると，生活の中で使えるようになる。これは，言語訓練教室で，今私が力を入れていること。

＜言語訓練教室での実践＞

この６年間，子どもたちの実態を見てはちょっと変え，新たに工夫を加えては様子を見，新しいプリントを作成し，……ということの繰り返しだった。学校現場にいるときには思いつかなかったことだ。誰でも即こういうやり方を取り入れることが出来るかといえば，難しいかもしれない。でも，知っておれば，漢字の指導に生かせる部分があるのではないだろうか。

きっかけは，在職中に担任していた子どもたちと言語訓練で再会したこと。もう高学年になっていた。漢字が読めない，熟語が正しく読めない，意味も分からないという現実に直面した。教科書に出てくる読みはできても，他のことばでの読み方を知らない。どうしてなんだ？と考えて気が付いた。耳で聞き覚えるということの難しい難聴児は，応用が利かず，特に音読みが難しいのではないだろうか。

＜指導記録より＞

10 月，漢字 1 字ずつの音・訓を聞いていくと，3 年生までの漢字で訓読みは全部できるのに，音読みのできないのが多く，これでは熟語が読めないはず。

身近な熟語を示して音読みを思い出させようとしても,（雨天→あめてん）のようになってしまう。聞こえにくいというのは，こうまで音読みが定着しないものなのか。

そこで，一年生の配当学習漢字のうち，音訓のある漢字の熟語などが復習できるプリントを作成した。11 月，N も必死に取組んだが，合格四つ。他は（右側→みぎかわ）（百円玉→ひゃくえんたま）のように濁点がなかったり,（雨ふり→あまふり）（雨がさ→あめがさ）のようにことばとして定着してなかったり,（車道→車動）と意味をとらえず書いたりした。

翌年 4 月，一年生学習漢字からの音訓プリント作成。（2 枚セット。互いに答えになって自学できるようにした。）

★音訓プリント　（実例　略）

2007 年（平成 19 年）4 月　音訓プリントは家庭学習とし，分からない言葉には印をつけてこさせ，言語訓練の場でその意味を教え，短文づくりを宿題とした。（辞書の例文丸写しではなく，自分のことで，という注文も付けて）。しかし，短文はうまく作れなくて，その指導にも時間を要する。年度途中から私が音訓プリントの言葉を使った短文を作り，コピーして渡すことにした。家で読みがな付けをし，母に教えてもらってノートに練習，次回テスト，と変更した。しかし，ことばの意味も分からないままの練習になっていたのだ。

2008 年（平成 20 年）4 月　言語訓練親の会（ささやき会）の母親たちとの話し合いの場で，次のように変えた。短文の読みがな付けは言語訓練の時にし，その場で本人がわからないと印をつける。本人に読ませながら意味を問い（本人が印をつけていなくても聞かれると説明できない言葉もある。），分からなければその場で「国語辞典」「ことば絵辞典」「慣用句・ことわざ辞典」「まん画日本の歴史」地球儀…などを駆使して教える。その際，部首・部首名・その意味などに目を向けさせている。

2009 年（平成 21 年）4 月　言語訓練の大半が漢字指導になってしまって，文法，物語文の読解などの時間がほとんど取れないことで，再度変更。短文の読みがなつけと分からない言葉への印づけは家でやっておくことにした。積極的にやってくるようになったのは成果だが，学年があがるにつれて漢字自体が抽象的な事柄を表すものが増えてくるため説明に時間を要し，物語文が犠牲になり，その都度子どもも私も残念がった。しかし，このやり方が軌道に乗り，漢字テストも 100 点を取ることが増えてきている。現在 6 年生でも，今やっと 4 年や 5 年の漢字学習をしている段階だ。漢字力，言葉の力もついてきつつあると自画自賛している。

★短文読みがなつけプリント

音訓プリントに取りあげた言葉を使って短文を作るわけだが，その際，でるだけ社会や人間関係に目を向けさせることのできる文を作るようにした。②⑥⑩などがその例と言える。

4 年　①健康な体なら，がんばれる。　②ぼくは関係ない，なんて言わないで。君もいたんでしょう？　③冷蔵庫に入れて冷やすと，おいしいし，いたみにくい。　④プールの水が冷たくて，びっくりした。　⑤お風呂のお湯が熱くて，冷まさないと入れない。　⑥友達に命令されるなんておかしい。健全な関係

じゃないよ。　⑦「1•2•3•4」先生の号令で体そうをした。　⑧友達と協力して，教室の大掃除をした。⑨私の父は，会社で働いています。　⑩労働者には，きちんと給料をはらわなければならない。　（後略）

★漢字テスト

４年　①□だちに□□されるなんて，おかしい。それは□□な□□じゃないよ。

②□□な□なら，がんばれるはず。　③わたしの□は，□□□□で□いています。

④「かけ□，□め！」せんせいの□□で，いっせいにスタートした。　（後略）

短文をノートに書いて練習してきているので，２週間後に漢字テストだ。短文には取りあげなかったことばを入れると，子どもたちは「何のこと？」と戸惑うこともあるから，百点を取るのは難しい。考えて考えて正答が得られると，えも言われぬ笑顔になる。百点を取るのが当たり前になっているＭちゃんが，④（はじめ）を初めての（初）を書いて，珍しく―1 点。　“猿も木から落ちる”と言うと，「私は猿じゃありません。」と口をとがらす。（どんなに上手な者でも失敗することがある）ということだと教えても，「猿じゃないもん。」と繰り返していたＭちゃん，二週間後には，ちゃんとこの言葉を自分のものにしていた。

★もう一つ忘れてならないのが，熟語の構成

「温暖」なら同じ意味の漢字だから（＝），「明暗」は反対で（⇔），「春風」は春の風で（→），「通学」は学校に通うで（←），「市立」は市が立てたで（主・述），「無力・不明・未来・非行」などは（打消しの漢字が頭につく）という６パターンのどれにあたるかを見分ける力をつけること。そのために，熟語の意味を説明するときにこれらのパターンを使ったり，どれにあたるかを考えさせたりしている。余談だが，中学生は今，漢字検定五級・四級・三級を目指している。

５．おわりに

取り留めのない話になってしまったことをお詫びする。特に経験の浅かったころは，何もかもが手探りで，がむしゃらに子どもたちと取組んだ。ここまでやって来られたのは，校内の先生方の支え，作文の会・文芸研の仲間たちとの学び合い，保護者の方々と連絡帳，学級通信などを通しての伝え合い，支え合い，そして忘れてならないのが聴障研の先生方との交流・学び合いなどがあったからだということ。教え子たちが一社会人として職場や家族，友人たちとかかわりを持って，仕事に子育てに生き生きと取組んでいる。この数年，世代を超えて教え子たちと集まる機会も多く，そんなときには教師という仕事って，本当に魅力的でやりがいのある仕事だなあと実感する。“自分の力でこの子たちをここまで成長させた”なんて夢にも思わないが，でも聴こえにくいというハンデイはあっても，だからこそ深い関わりが結べたことは，今でも私の財産だ。壁に突き当たった時に思い出してメールをくれたり相談に訪ねてきてくれたりすると，人間として私も精一杯一緒に考えたいという気持ちが沸き立つから不思議だ。

最後に，私を支え，子どもたちを支えてくれた相田みつをさんのことばを贈る。
『ともかく具体的に動いてみるんだね。具体的に動けば具体的な答えが出るから。』

難聴学級で学んで

泣きながら笑う日，難聴学級５０年に思うこと　　２期生　西　村　政　之 さん

難聴学級の２期生として参加して，もうほとんどの後輩たちが名前も知らない中，あちらこちらで会話している光景。手話に花が咲いている光景に変わったなとしみじみ感じた一日だった。

８歳で難聴になり，西小学校に来た当時，手話を使っている仲間はいなかったように思う。自分自身も手話を知らず，ひたすら口の動く形を読み取ろうとするしかなかった当時。高校を卒業するまで手話に触れる機会はなかった。

そんな自分は勉強面ではできていたほうだと思っていたので，多分親兄弟も先生方も「西村はうまくいっているほうだ」と思われていたかもしれない。自分自身もそう思っていた。

しかし，国家公務員試験に合格したけれど，採用面接を受けた５つの官庁すべてから「耳が聞こえないとねオーラ」を浴びせられ，諦めていた。

そんなある日，歯科技工士の専門学校が東京教育大学附属聾学校（当時）にあることを，たまたま広げた専門学校案内の雑誌で知った。試しに受験してみたら合格したので，歯科技工士を目指すことにした。偶然も運命と考えて。

附属聾学校での生活はカルチャーショックの連続だった。手話に触れ，読話とかすかな聴力に頼るコミュニケーションとは全然違う，会話とはこのことだったんだ！と，今までの自分の思い込みや視野の狭さに気付かされた。

今までの自分は人を傷つける言葉に気が付きもせずにいたと分かったときは恥ずかしくて仕方がなかった。残念だと思うが，（当時の）口話と聞き取りに頼る難聴学級のシステムは，意義はあるけれど個人差の大きな，難聴という障害においては，かなり欠陥があるように思える。相手の言っていることが分かり，自分の言いたいことが正確に伝わるようになるには，手話を併用しないと難しいと思う。

パーティーでも後輩達が手話を使って盛りあがった様子を見てとても感動しましたね。コミュニケーションの取れることの幸せは説明できないものです。難聴学級を否定しているものではありませんので，そこは間違えないでください。聴力がある程度残っていた小中高時代に聞き覚えた歌声やメロディは今なお私の記憶に残り，人生を豊かにしてくださったと感謝しています。

「ドレミ」じゃなく「１とー２とー」とリズムを取る宇根先生の声。式で全校生徒で歌う校歌･･･難聴学級にいなければここまで記憶に残らなかったと思います。

たくさんの先生方，関わりあったみんなに心からありがとう！！！！

映画「泣きながら笑う日」

５期生　　黒　岩　美　鈴 さん

この手記を読んでいる皆様　こんにちは。昭和 53 年城北中学校を卒業した黒岩美鈴です。

文集作りをすると聞き，せっかくの機会なので自分が覚えている「泣きながら笑う日」について思い出しながらこの原稿を書いています。

当時，映画の撮影は我々２年生だとはじめに聞かされていました。先生から「映画の撮影があるよ。」と聞かされたときは，自分達が映画に出られる嬉しさで胸膨らませていました。

教室の窓から顔を出した坂本九ちゃん。

彼は廊下に立っているたくさんのカメラマンや道具係の人達の中をくぐり抜けて颯爽と教室の中へ入ってきました。

テレビで見たまんまの屈託のないさわやかな笑顔で一人ひとり挨拶をして話しかけてくださいました。疾風のように現れて疾風のように去っていって，あっという間の出来事でした。

しかし，皮肉なことに修学旅行中に撮影がありました．１年生と３年生の中から何名か選ば

れて撮影が行われました。留守中に撮影が終わってしまっていたのです。複雑でとても残念な気持ちでした。私達のクラスから撮影に参加できなかったので，今となっては苦い思い出です。

改めて映画を観て感じることは，自分達が出ていようが出ていまいが立派にできあがったことで，難聴学級のことが世に知れ渡り，卒業生のことが理解され，健聴者とともに幸せに暮らしていけることを願ってやみません。

難聴学級５０周年を祝う

１９期生　　桒　田　明　弘 さん

広島県内での初の難聴学級が福山市立西小学校に開設されて 50 周年を迎えた。その記念式典に難聴学級卒業生として出席した。

西小学校の生徒の合唱と城北中学校の生徒の太鼓が鳴り響く中で開会した式典の中で，挨拶を述べた池口義人元校長先生の話の中で，「難聴の子に言葉を」との西馬弘基先輩の父親とともに立ちあがった保護者の声を受けて西小に難聴学級が開設され，1970 年代には城北中，西幼稚園，蔵王保育所，「ゼノ」こばと園にも開かれ一貫した教育環境が整えられたという歴史を初めて知り，50 年の歩みを感じた。また，映画「泣きながら笑う日」での，未来に不安を抱いた母親が難聴の子と共に芦田川に入水するシーンが，西馬先輩の母親の実話と知り，驚いた。難聴への理解がまだ低かった時代の中で，学級の誕生に込めた保護者達の想いに触れたような気がした。

体験発表の舞台で，遊べない辛さでイヤホンのコードを持って箱式補聴器を振り回したことがある西馬先輩をはじめ田中康弘先輩，後輩の寺本佳代さんが学級の思い出や社会人としての苦労などの様々な体験を踏まえて語った「難聴者自らから健聴者との積極的な交流を」の言葉が，理解のずれなど仕事での周囲との距離感が難しいときもある難聴の我が身にしみた。難聴者と健聴者との間の見えない壁を掘ってトンネルを作ろうと励まされているような思いがした。

難聴者と健聴者が共に音楽を楽しめるような演奏の仕方を研究している「音楽感受合奏団」の「もりのおとぶくろ」の演奏も，そのトンネルだね，と聞きながらそう思った。

難聴の子供を育てる夫婦の姿を描いた福山ロケの映画「泣きながら笑う日」（1976 年）も

上映された。白黒からカラーになってより鮮明な映像が流れるスクリーンに，マイクを持ってヘッドホン姿の児童に言葉を教える堀江先生の姿が映ると，会場がワッと沸いた。その中で，母親が一生懸命子供に言葉を教える印象的なシーンがあった。発音練習を一緒にやって初めて言葉をしゃべった幼い私と，それを喜んだ両親の姿が重なって見えた。親や先生達に支えられて言葉を覚え，いろいろ学んで社会進出ができたことを改めて感謝した。

テレビの字幕や携帯電話のメールなどソフト面が豊富な今の時代でも人と人とのふれあいというハード面は変わらないということを改めて学んだ映画だった。

先生や健聴のクラスの人と読話や筆記を通じて質問など勉強が普通にできるということが，人と人とのふれあいそのものを振り返ってそう思えた。未来の学生もそれを大事にしてほしいと願っている。

会場や食事会で卒業生や先生たちが広島カープの優勝話など様々な話題を談笑する光景を見つつ，難聴学級で学んでよかったと実感した節目の日だった。

ありがとう。

私が在校した頃にはなかった手話通訳を取り入れるなど，難聴児の学びが広がる難聴学級のこれからの発展を祈っている。

〈イラストに思いを込めて〉

映画「泣きながら笑う日」の難聴の子をモデルにして

「太陽の帽子＝心の太陽」

「翼＝希望あふれる未来（芦田川の入水シーンが二度と起きないように願いを込めて）」

「靴の五線譜＝西小・城北中・西幼・ゼノこばと園及び蔵王保育所または親，先生達に支えられて自分の音（人生）を紡ぐ。

「５０周年の文字ハート＝人と人とのふれあい」

「箱式補聴器と耳掛け補聴器＝難聴学級５０年の歩みのイメージ」を表現しています。

ちなみに，ハートの中は福山の心の花「バラ」です。そして，顔の涙は“泣きながら笑う日”のテーマを表現しつつ，口の中の「あ」は「難聴の子に言葉を」の学級の原点と幼い私が初めて言葉をしゃべった喜びを重ねて描きました。手記で気付いたことも盛り込んでいます。

記念式典に参加して

２１期生　宮　井　美　紀 さん

2016 年（平成 28 年）10 月 22 日に福山で記念式典が行われることを知り，滋賀から参加しました。

受付のところから懐かしい先生たちや友人たちに会えて，学生時代に戻ったような感覚になりました。これだけでも滋賀からかえった甲斐があり，感慨無量でした。

今回の式典で福山は日本で唯一就学前から中学校まで一貫した難聴児教育制度が実施されていることを初めて知りました。何となく全国各地そういったところがあるんだろうと思っていたので，意外でした。福山出身で聴覚障害者の私が幼少の頃から難聴児教育を受けられたのは，当たり前のことではなく，環境に恵まれていたのだと，改めて今まで携わってくださった先生方，家族に感謝の気持ちでいっぱいです。

「泣きながら笑う日」の映画は 1970 年代に撮影され，当時の障害に対する偏見や家族，親の葛藤などが描かれていました。40 年近く前の映画なので，時代背景がやはり今とは違うので，あまり共感や感情移入ができませんでした。当時の障害者が生きづらさを感じながらも，周りに障害の理解を広めようと努力してくださったから，この 40 年で障害者に対する考えが変わり偏見も少なくなったと思います。

この映画で考えさせられたことを挙げるならば，高熱が出た我が子に障害の出る可能性のある注射をさせるか，ということです。３人の息子をもつ親の立場で考えると，非常に難しい選択だと思います。障害を持つ辛さは私や主人にもよく分かるので・・・。でも，命には代えられない。そこの部分はすごく親として考えさせられました。

体験発表では，友人がスピーチをするとのことだったので楽しみにしておりました。普段とても明るく朗らかな彼女ですが，そんな彼女にも学校や職場で障害のことで悩みを抱えていました。でも，自分で何とかしようと一生懸命頑張って，周りから理解を得ることができたそうです。いつも明るく頑張っている彼女を年下だけど尊敬しています。

今回の式典でいろいろなことを知ることが出来たし，また，懐かしい人たちに会えたし，大変よい経験になりました。記念式典実行委員会やスタッフの皆様，ありがとうございました。また，こういう機会があれば参加したいです。

記念式典に参加して

２６期生　蔵　本　ゆ　か　り さん

広島県文化センターふくやまで開催された『福山市難聴学級開設 50 周年』『映画“泣きながら笑う日”制作 40 周年』式典に参加しました。

福山市長をはじめ多くの来賓の方々が出席されており，西小学校の児童による合唱や城北中学校有志による城北太鼓のアトラクションも行われていました。

式典後には，難聴学級を卒業され現在社会人として活躍されている３名の体験発表がありました。難聴学級が出来るまでの経緯や大変だったことなどの体験を聞くことで，自分を振り返

るきっかけにもなりました。難聴の度合いはみんな違うけれど，それぞれ困難を乗り越えて頑張っていると思うと自分自身の励みにもなりました。

また，福山市は難聴の子供達のために幼児期から中学校まで系統的総合的な教育体制が調えられていることに，とても嬉しく思っています。難聴学級設置運動を起こし，様々な活動を通して教育の場を立ちあげてくださった多くの方々のおかげで，今があるのだと改めて実感し，感謝の気持ちでいっぱいです。

次に，難聴の方と健聴の方が一緒に音楽を楽しめる「音楽感受合奏団」による朗読と演奏や映画「泣きながら笑う日」の上映がありました。難聴の人の音の感じ方には違いがあります。聞こえない人でも楽しめるよう，演奏者にスポットライトを当てたり，スクリーンには朗読されるストーリーや演奏している楽器の名前が映し出されたりと，素晴らしい演奏が行われました。映画の内容は，今まで多くの苦労や困難の中で生き抜いてきた親子の話の内容で，その親子の当時の感情が本編で語られていたものでした。そのため，テレビで観るようなドキュメンタリーとは違って，気持ちがよく伝わってきました。私自身共感できた部分が多く，以前同じ映画を観る機会があったのですが，何度見ても感動する映画だと思いました。日常生活をする上で補聴器も大切ですが，やはり周りの人たちの優しさや痛みの分かる人が身近にいるということが，最も大切だということを実感しました。また，一人でも多くの人が難聴について少しでも理解を示してくださればいいなと思いました。

2016 年（平成 28 年）4 月に障害者差別解消法が施行されましたが，まだまだ手探りの状態のため，障害のある人が障害のない人より不利になることが見受けられます。障害の有無で分け隔てられることのない共生社会の実現のためにも，周囲の方々の理解が得られるよう，まずは身近なところから自ら進んで働きかけることが大切だと感じています。

このたびの式典に参加させていただいたことで，普段会うことが出来ない同級生や先輩，先生に会って話をすることが出来たため，有意義な一日となりました。

記念式典・食事会に参加して

３３期生　井　上　真　実 さん

10 月 22 日に福山市難聴学級開設 50 周年の記念式典が行われることを知り，母と出席させていただきました。当初，初対面の方々ばかりなのでは‥と不安でしたが，母の知人の方々や自分が難聴学級に在籍していた頃の先輩後輩と会えたので，その不安も解消されました。

体験発表では顔見知りの方がおられ，共感できるところや時代の変化により自分の代ではあまり感じなかったところなど知ることが出来てよかったです。映画『泣きながら笑う日』は久しぶりに観ましたが，いつ観ても自分の母も同じような思いを抱いていたのだろうかと考えさせられます。この映画を観る度，小中学校のどちらに通っていた頃か忘れましたが，下校時に見知らぬ男性に大声で罵倒されたことを思い出してしまいます。何がきっかけだったのか，当時は髪の毛を結ぶことが多く，補聴器が見えやすかったからでしょうか。何もしていないのに，なぜ見知らぬ男性が大声でわめいていたのか不思議でたまりませんでした。たまたま居合わせた親切そうな方に何を言ってきたのかを聞いてみたところ，あまり知らぬほうがよいと言われ

たことでようやく罵倒されたのだと気付きました。障がいがある，ただそれだけで理不尽な思いもしなきゃいけない。それがどうしようもなく，悔しくてたまりませんでした。

食事会は，最初あることを知らず，式典だけだと思っていたら，体験発表をされた西馬さんのお誘いで判明しました。迷いましたが，行ってみないよりは行ってみた方がよいと思い，出席することに決めました。しばらく会っていない先輩後輩もたくさんいるので，それぞれの近況を聞くことができて嬉しかったです。一期生をはじめとする難聴学級の大先輩方と話せたのも貴重な経験の一つになりました。またこういう機会があれば，喜んで参加したいものです。

出会いに感謝

大　本　節　子 さん
（２２期生 大本弥生さんの保護者）

１歳の我が子の聴覚障害が分かり，補聴器を付けて間がない頃，「うちにも難聴の中学生の息子がいること，福山の小学校には難聴学級があること」を話され，「お母さん，頑張ってくださいね。」と話しかけてくださる見知らぬ男の方に出会いました。「失礼ですが，お名前は。」とお聞きすると，「西馬です。」と笑顔で子供を見つめてくださる，その心が有難く，30 年後の今も，私の脳裏に焼き付いています。先ずはことばを覚えることが一番大事なことを。でも，人間として生きてゆくためにはどういう力が必要となり，何を大事に子供を育ててゆかねばならないのか等々を。

帰宅後考える機会を与えてくださった最初の方であり，ほんの数分の出会いにより，路頭に迷い心細い親子に一筋の光を与えてくださり，未熟な私に生きる力を与えてくださった西馬さんに，いつの日かお目にかかり，感謝の言葉で伝えねばと思いつつお会いする機会もなく日々を過ごしてしまったことを深く反省したのが，「福山市難聴学級開設 50 周年式典」の新聞記事で，西馬さんがお亡くなりになっていると知ったときでした。

遠方に住んでいるため式典に出席できない我が子のために伝えるべきことがあるはずだとの思いで，私は出かけました。諸先輩の方々の想像を絶する数え切れない努力と行動力と苦労，親が子を想う心の叫びが行政を動かし，難聴学級が出来たこと等を知りつつも感謝の気持ちをお伝えすることもなく過ぎ去った日々を深く反省する一日となりました。

１歳の聞こえない子が育つためには，こばと園，保育所，幼稚園，小学校，中学校の難聴学級，高校，その時々に出会った先生，友達，同障の友，近所の方々から見知らぬ方々まで数えきれぬ程の人々にお世話になり，心をいただき育つことが出来たこと，その方々の力の大きさを考えれば，親の力なんてほんの一握りに過ぎないこと，それらは障害があればこそ多くの人々から温かい心が頂けたことも大いにあること。そして，それを決して忘れることなく感謝の気持ちを伝える大事さ等々，今後子供達に会ったときに私が伝えてやるべきことを考えるよい機会を与えていただくことが出来た式典に感謝いたします。

お世話になった方々，本当にありがとうございました。

記念式典後の食事会でのご挨拶

１期生　　矢　吹　靖　彦 さん

皆さん，本日はようこそお食事会にご参加いただき，お礼を申しあげます。

“せっかく卒業生が集まるのなら，食事会をしてほしい”との希望が出されたことにより，この会のお世話を頂いた方のお力で開催にこぎつけることが出来ました。

お世話くださった方を紹介します。

２３期生の　渡辺　多恵さん　　吉岡　芙美子さん

２５期生の　寺本　佳代さん

３０期生の　網浜　陽紀さん

司会・進行をしてくれるのが

６期生の　西馬　弘基くん　です。

私はここに参加されている方の親ではありません。

５０年前の１９６６年（昭和４１年）に開設された西小学校難聴学級は１年生と３年生とでスタートしたのですが，私は３年生でスタートした最初の卒業生，つまり第１期生の矢吹靖彦です。よろしくお願いします。

当時は映画「泣きながら笑う日」の難聴学級の授業場面と同じ感じでした。私たち生徒は補聴器を外してコード付きのヘッドホンをはめて，先生がコード付きのマイクを持っての授業を行いました。「集団補聴器」といいます。

先生の声がマイクとヘッドホンを通じてよく聞こえたことを思い出します。コード付きのマイクですから，先生がコードに引っかからないように動くのが大変だったんです。黒板に書いたり，私達生徒が「はい」と手を挙げて発言しようとする度に，先生がわざわざマイクを口元へ近づけてくださいました。先生にとっては大変苦労だったと思います。

若い方たちはＦＭ補聴器になり，身軽になりましたね。私は第１期生ですから，年齢的には６０近くになります。若い方の３５期生は２０代でよろしいですか。まあ，私よりずっと若いですねえ。私達とは親子ほどの年齢差のある方もいて戸惑いもあるでしょうが，同じ難聴学級の卒業生としてほんの短い時間でございますが，難聴学級時代を懐かしく思い出しながらご歓談いただければ幸いです。

では，これより乾杯の音頭は第２期生の田中康弘君に取っていただきたいと思います。

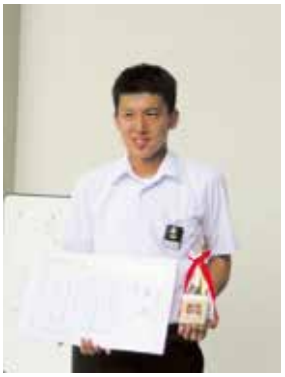
（乾杯）

中学生の主張大会に出場し金賞を受賞

福山市立城北中学校三年生（福山市立西小学校難聴学級卒業生）の大元晴貴君が中学生の主張大会に出場しました。その前に全校集会で発表し，発表後たくさんの意見や感想をもらいました。その後一言「みんなには人を変える力がある」と返した大元君。本番も堂々とした素晴らしい発表でした。

結果は，金賞。おめでとうございます。（応援もたくさん来てくださいました。）

出場時に発表した内容を掲載します。



２０１７年（平成２９年）７月１１日（火）中国新聞

ピープル

自分変えた経験

後輩らへ伝える

「人生につまずきそうになった時に受賞を思い出したい」と話すのは、8日に福山市であった「中学生の主張大会」で金賞に選ばれた城北中3年の大元晴貴さん(14)＝福山市駅家町。生まれつきの難聴で、積極的に人と関われなかった自分を変えた経験を発表した。

特別支援学級以外の友人との交流に違和感があった大元さん。中学校の部活動では先生や先輩の話が分からなくても、「僕が関われば迷惑になる」と消極的だった。

主張大会では、分かったふりをやめた経験を振り返った。祖母の助言で「自分の居場所は自分でつくる」と決意し、皆のための行動を考えたらチームメートに認められたと力を込めた。「一歩踏み出すのは怖いけど、やりたいことがあるなら今、変わった方がいい。後輩たちにもそう伝えたい」（衣川圭）

福山市立城北中学校３年　大　元　晴　貴 さん

僕に届く声はみんなとは違う形をしています。僕は生まれつき耳が聞こえにくいので，小学校の時から難聴特別支援学級に入っています。支援学級の友達と仲良くなればなるほど，交流学級の友達とのコミュニケーションに違和感を覚えるようになりました。僕の中に「違う教室で勉強する僕は，みんなとは違う。だから，みんなには，話しかけない方がいい。」という気

持ちがめばえました。いろいろな人と話したいけれど，どうすればいいかわからず悩む毎日でした。

中学校に入り僕をもっと悩ませたのは部活動でした。僕はバスケットボール部に入りました。先生や先輩の話がわからない時がありましたが，周りを困らせないためにわかったふりをしていました。そのため準備やかたづけの仕方がわからず，練習でも周りに迷惑をかけ，自分だけが怒られる日々でした。そんなある日，チームメイトから「練習する気がないんなら帰れ」と言われました。自分では一生懸命しているつもりなのに何がいけないかわかりませんでした。僕はその日以来，部活にも学校にも行きたくなくなりました。人とかかわるのが怖くなり，電車で福山駅まで来てもそこから足が進まず，引き返すこともありました。学校を休んだ日，布団をかぶって泣きました。「なんで自分ばかりこんな目に遭うんだろう。僕が何したの？　みんな僕が邪魔で仕方ないんだ。僕が関わろうとすればするほど，みんなの迷惑になっていく。もうみんなとかかわるのはやめよう！」僕は現実から逃げて行きました。

そんな僕に，いつもは，黙って話を聞いてくれる，祖母が言いました。「今は辛いけどはるが自分で自分の居場所を作るしかないんよ。はるは作る努力したん？」と。僕は言い返す言葉がありませんでした。僕は自分からは何もしていないことにはじめて気付きました。僕は「いつか絶対に自分の居場所を自分で作る」と心に決めました。「みんなから必要とされる選手になり，強くなる」という目標を立て，辛くても頑張りました。「わかったふりをするのはやめよう。」「みんなのために何ができるか考えて行動しよう。」そうすることで少しずつチームメイトにも認めてもらえるようになりました。ある時，「お前は頑張ればシックスマン（バスケットボールの試合においてベンチスタートのサブメンバーの中でも特に活躍できる選手）になれる。」と言われ，とてもうれしかったです。自分を必要としてくれている仲間がいる。それだけで僕は，これからもチームのために頑張ろうという気持ちがわいてきました。

僕に届く声はみんなとは違う形をしています。違うことで，僕は辛い思いもしてきました。でも，そのおかげで得たものがたくさんあります。僕は，相手の声を，表情や動作，雰囲気から，一生懸命読みとっています。相手の気持ちが伝わり，僕の気持ちをわかってもらえた時，僕は幸せな気持ちになります。言葉は相手に対する思いが形になったものだと思います。今，僕には励ましてくれるチームメイトや，クラスの仲間，家族がいます。僕もいつか，誰かを支え，励ましていける人になりたいと思います。最後に僕を支えてくれた皆さん。ありがとうございました。

福山市市制 100 周年の年は，福山市難聴学級開設 50 周年・映画「泣きながら笑う日」制作 40 周年の記念すべき年でもありました。

福山市立西小学校に難聴学級が開設され，これまで多くの子どもたちが，ここで学び社会に出ています。開設時の写真からは，教師と子どもたちが，口元をみつめ，ことばを獲得しようと，勉強をしている様子がうかがえます。映画「泣きながら笑う日」には，難聴児を持つ親としての気持ちが描かれ，苦しみや悲しみも伝わってきます。周囲の冷たい視線もあった中で，たくましく生きる姿に感動しました。

社会の変化とともに，子どもたちを取り巻く状況も変化しています。

現在は，医療・科学の発達もあり，早期発見，治療の向上と補聴器や人工内耳等の機器の向上もめざましいものがあります。教育においても，FM マイク等の利用や指導方法の工夫など，ことばの獲得とコミュニケーションの力を育てる取組を進めているところです。

また，障害者差別解消法の制定や特別支援教育の充実など，「共に生きる」ことへの手助けもあります。これから先も，お互いに手をさしのべあって生きていきたいです。

また，社会福祉協議会様より，難聴学級への視覚支援のために，何台も電子黒板セットを導入していただきました。日々の授業に活用しています。ありがとうございました。

50 周年という節目の年に，開設当時から，お力を添えてくださいました多くの皆様に深く感謝申しあげます。ありがとうございました。

実行委員会事務局長　　小　畠　八　重

40 年前，家庭の事情で大阪から郷里福山に U ターンして，合併間もない地域の小学校に赴任した私は，体育館で上映された「泣きながら笑う日」を子ども達とともに涙をながしながら鑑賞したことを思い出します。

その後生まれ，今は元気で仕事をし家庭を持ち子どもも設けて幸せに暮らしている息子が 3 歳の時，おたふく風邪が原因で片耳難聴になり，親として大変な心配を経験しました。

今から 20 年前，教育委員会に在籍していた私は，「難聴児親の会」の切実な要望を受ける立場となりました。

この度の記念行事は，そうした私にとって避けて通れない取組でした。人工内耳の開発が進み，難聴者も楽しめる音楽が生み出されていることを知り，未来が期待できることを体得できた意義ある機会となりました。

実行委員会事務局相談役　　髙　橋　和　男

映画「泣きながら笑う日」のDVDをお貸ししています

福山市を舞台に，障がい児（者）の福祉・教育の理解と啓発のため 1974 年（昭和 49 年）に発足した「泣きながら笑う日制作委員会」の熱意と努力と多くの方々からの善意の募金が結び合って，1977 年（昭和 52 年）に一般公開されました。

物語は，難聴の子どもを持つ若い夫婦の愛情と苦悩の日々を描き“人の痛みを知る心”“人間の愛情の尊さ”を伝える感動の映画です。

（脚本・監督：松山善三，主演：坂本　九 他）

長い年月が経過し，貴重なフィルムが劣化する恐れや，当時の思いを知る人たちが少なくなりつつあったため，2009 年（平成 21 年）の社会福祉法人化 40 周年にＤＶＤ化致しました。

福山市社協では，この映画を多くの皆さんにご覧いただきたく，ご希望される方には無料で貸出をしていますので，お問い合わせください。

【問い合わせ先】
福山市社会福祉協議会　福祉のまちづくり課
TEL(084)928-1333　FAX(084)928-1331

◆編集・発行　　社会福祉法人　福山市社会福祉協議会
〒720-8512　福山市三吉町南二丁目11番22号
TEL(084)928-1330　FAX(084)928-1331

◆発行日　　2017年（平成29年）10月
◆制　作　　有限会社 秀文社印刷

泣きながら笑う日

題字作成：伴　淳三郎さん　　タイトル画作成：宮城まり子さん（表紙画含）

映画「泣きながら笑う日」を製作した松山善三監督は，1963 年（昭和 38 年）に創立された，社団法人「あゆみの箱」（映画監督や芸能人，芸能関係者が中心となって，障がい児のために何か出来ることをしようと，集まって創った会）の会員であり，当時，この「泣きながら笑う日」制作にあたり，同じ会員であった，伴　淳三郎さんに題字を，宮城まり子さんにタイトル画をお願いしたところ，内容をご理解いただき，快く承諾してくださり，この力強く温かい作品を制作して頂きました。